

台湾情報誌

交流

2017年11月 *vol.920*

公益財団法人 日本台湾交流協会

Japan-Taiwan Exchange Association

日本で活躍する台湾企業 (Advantech)



交流

2017年11月
vol. 920

目次

CONTENTS

日本で活躍する台湾企業 IoT市場を牽引するテクノロジーイネイブラー Advantech …… 1 ～ Advantech Japanマイク小池社長へのインタビューより～ (福岡 賢昌,根橋 玲子)	
台湾茶の歴史を訪ねる 第四回 (4)東南アジアから旧満州まで輸出された包種茶の歴史 …… 10 (須賀 努)	
日本語パートナーズ《台湾第一期》活動のご紹介(3) …… 15 (川谷 紗知子, 斎藤 希美)	
片倉佳史の台湾歴史紀行 第七回 高雄(7)―南沙(スプラトリー)諸島の歴史 …… 22 (片倉 佳史)	
台湾ランニング事情 第9回 指南宮トレイルレース …… 31 (石原 忠浩)	
日本台湾交流協会事業月間報告 …… 36	

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人日本台湾交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人日本台湾交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

●● 日本台湾交流協会について ●●

公益財団法人日本台湾交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も大宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

連載「日本で活躍する台湾企業」

IoT 市場を牽引するテクノロジーイネイブラー Advantech ～ Advantech Japan マイク小池社長へのインタビューより～

法政大学グローバル教養学部 福岡賢昌
昭和女子大学現代ビジネス研究所研究員 根橋玲子

財務省発表の対内直接投資総括表によれば、2016年度の対日直接投資額は3兆8,307億円と前年比を大きく上回り、統計上過去最高となった¹。2016年度の台湾からの対日投資額は、台湾の大手EMS企業の鴻海精密工業のシャープ買収等の影響もあり、アジアで2位（1位はシンガポール）である²。

リーマンショック後の円高を契機に、日本企業が海外での製造を加速する中、鴻海精密工業は、2012年にシャープディスプレイプロダクトのM&Aを行い、以降日本でのものづくりを行っている。また、2014年5月には、台湾大手工作機械メーカーの友嘉集団が総合工作機械・産業機械メーカーの老舗である株式会社池貝の株式を中国上海電気から取得し、その後も優れた技術力を有する日本企業への工場投資を促進している。さらに、同年6月には台湾大手銀行である中国信託商業銀行が、東京スター銀行を5億2,900万米ドルで取得、日本の中小企業の国際化に向けてのファイナンスに意欲を見せている。

このように、特に近年、台湾企業の対日投資が堅調に進んでいるにもかかわらず、これまで「日本で活躍する台湾企業」はあまり注目されてこなかった。そこで、本連載を通して、地域に根差して活躍する台湾企業の取り組みに光を当て、その実態を明らかにしたい。

1. はじめに

日本政府は2017年6月に「未来投資戦略2017」を発表した。そこでは「経済の好循環は確実に拡大しているものの、民間の動きは力強さを欠いており、それらは、①供給面では、長期にわたる生産性の伸び悩み、②需要面では、新たな需要創出の欠如に起因している」という見解を示している。そして、「中長期的な成長を実現していく鍵は、近年急激に起きている第4次産業革命（IoT、ビッグデータ、人工知能（AI）、ロボット、シェアリングエコノミー等）のイノベーションを、あらゆる産業や社会生活に取り入れることにより、様々な社会課題を解決する「Society 5.0」を実現することである³とした。

実際、第4次産業革命は、ICTの新たな進展をもたらす。内閣府によれば、ICTの新たなサービスの需要創出効果は年間最大で1.8兆円であり、日本のみならず、全世界ベースでのIoTが付加する経済価値（売上増加効果やコスト削減効果の総和）は、2013年～22年の累計で15.7兆ドル、特に「公共サービス（含む行政）」が4.6兆ドル、「ものづくり革新」の製造業が3.9兆ドル、「流通・小売・物流」が2.3兆ドル（以上、主なシンクタンクの試算）である⁴。

1 財務省(2017)「平成28年本邦対外資産負債残高統計」(5月26日付)より。

2 台湾經濟部投資審議委員会(2016)「105年1月核准僑外投資、陸資來臺投資、國外投資、對中國大陸投資統計」より。

3 首相官邸(2017)「未来投資戦略2017」http://www.kantei.go.jp/jp/headline/pdf/seicho_senryaku/2017_honbun1.pdfより。

4 内閣府(2017)「日本経済2016-2017—好循環の拡大に向けた展望—」第2章第1節第4次産業革命のインパクト http://www5.cao.go.jp/keizai3/2016/0117nk/n16_2_1.htmlより。

このように第4次産業革命は、将来的に大きな経済価値を生み出す。しかし、日本のこれらに関する取り組みは、諸外国と比較し大きく遅れている。さらに、IoTによる自産業・業界における市場拡大に対するIoTへの期待についても、他国企業と比較して総じて低い水準の回答である⁵。このような状況が続けば、将来における日本企業及び様々な産業の国際的な競争力を著しく損なうだろう。

そこで、第4次産業革命の要素の一つであるIoT分野において、世界と日本を牽引するグローバル企業を紹介する。台北に本社があり、産業用PC分野では世界トップシェア⁶の企業であるAdvantech社（以下、Advantech）である。その日本法人であるAdvantech Japanは東京の浅草に自社ビルを構え、地域に密着しながら、IoTの日本市場拡大に取り組んでいる。2017年には設立20周年を迎えた。昨今では2017年の金沢市でのイベントを皮切りに、47都道府県で「Advantech IoT47®プロジェクト」（図1）を開始し、補助金の削減等によってこれまで以上に自助努力が求められる地方におけるIoTリタラシーの向上を目指し、各地域の特性を活かしたソリューション（地方とIoTとの相乗効果）を提供しながら、地方創成の一役を担っている。

本稿は、2017年9月4日にAdvantech Japan東京本社にて、筆者がマイク小池社長に対して行ったインタビューと各種公開情報を参考にし、纏めたものである。

5 総務省(2016)「平成28年度版情報通信白書」第1部 特集IoT・ビッグデータ・AI～ネットワークとデータが創造する新たな価値～第3節(3) <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h28/html/nc123330.html> より。

6 Advantech社パンフレットより(2015年IMS Research社調べ)。

図1 Advantech IoT47®プロジェクト



出所：Advantech Japanより提供

2. 会社概要

(1) 全体概要

Advantechは、現CEOのKC Liu氏と現Executive director（前President）のChaney Ho氏が1983年に共同で設立した企業である。設立以来、高品質・高性能コンピューティングプラットフォームの開発・製造において技術革新を生み出してきた。Advantechのビジネスは、大きく「エンベデッドコンピューティング」、「インテリジェント・システム」、「インダストリアルIoTソリューション」、「インダストリアル・コミュニケーション」、「サービスIoT」、「設計・製造サービス」という6つの事業領域に分かれており、商品アイテ

ムは3,000を超える。また、その提供分野は、物流システム、医療、エネルギー、交通等、幅広く多岐に渡っている。

現在の企業のミッションは、2010年に現CEOのKC Liu氏が掲げた「インテリジェント・プラネット」の実現であり、組み込み&オートメーションソリューションのグローバルリーダーになることが、一義的な目標である。

そのミッションの実現及び目標の達成に向けて、Advantechは上述したビジネスを、北米、西欧、東欧、中国、台湾、日本、アジア太平洋、南米等、全世界で23ヶ国、93都市（2017年現在）に展開してきた。全世界で社員数は8,000名を超える（2017年現在）。また、近年ではIoT戦略を加速させるため、2003年に中国（昆山）〈総面積27,000㎡〉、2014年に台湾（林口）〈総面積35,000㎡〉の製造工場において、エネルギー消費量の可視化等を可能とするIndustry4.0を具現化し、最新のIoTを実証できるインテリジェントキャンパスを構築した。

これらの取り組みは、着実に結果として数字に表れている。例えば、2016年度の連結売上高はNT\$420億（1,554億円：換算レート1NT\$ = 3.7JPY）であるが、これは前年比約10%増に相当し（2015年NT\$380億）、過去最大である⁷。また、2015年度、2016年度のNikkei Asia 300実力企業ランキング（日本経済新聞社が選ぶアジアの主要上場企業の年度決算を増益率などの指標で分析したランキング）では、それぞれ総合51位、総合36位であり、情報機器分野では2年連続トップとなった。

このように、今では、AdvantechはIoT関連ビジネスにおいて、グローバルIoTプラットフォームサービスを提供する企業として、欠かせない存

在となっている。

（2）Advantech Japan

Advantechの日本法人は1997年東京の三田に設立され、2017年には設立20周年を迎えた。社員は2017年10月現在、80名である。三田に設立した後、港区芝、千代田区への移転を経て、2016年には東京の浅草に自社ビルを構え（台湾企業が自社ビルを有していることは大変珍しい）、現在に至っている。近年では2012年にAdvantech Japanの社長に就任したマイク小池氏がリーダーシップを発揮し、日本の顧客に対して、Advantechのグローバルなリーチを活かし、ユニークな価値を提供しながら、急速にビジネスを拡大している。売上成長率では3年連続で、同社海外現地法人の中でトップである。

日本の拠点は東京（浅草）本社だけではない。2000年には大阪支店を開設し、さらに、2017年には名古屋支店を開設した。特に名古屋に進出した理由は、トヨタ自動車を始めとして日本における製造業の集積地だったこと、そして、日本の製造業のGDPにおいて関西圏が約6割を占めていた（2015年に策定した5か年計画において、日本の製造業のGDPを調査して判明した）からである。つまり、そこにはデータに基づく台湾本社による合理的な意思決定があった。なお、関西拠点では、Industry4.0、IIoT（Industrial Internet of Things）関連ビジネスを主とし、東京本社は組み込み関連のビジネスを主としている。

このように、Advantech及びAdvantech Japanは、世界のIoTビジネスにおいて欠くことができない存在になるまで発展したが、その要因はいったい何なのか。以下、インタビューにおけるマイク小池社長の回答を中心に纏めながら論じてい

⁷ Advantech 2016 Annual Reports より。

2. 成功要因

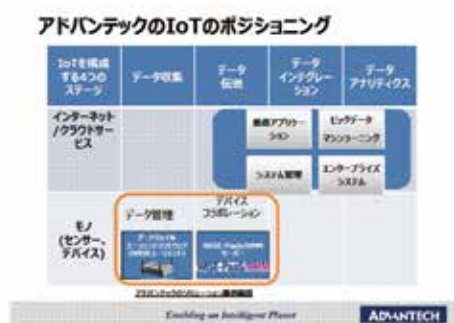
(1) 経営者のリーダーシップと卓越した先見性

まず、共同創業者及び現 CEO である KC Liu 氏のリーダーシップと卓越した先見性があげられる。KC Liu 氏は IoT 市場の将来像を比較的早い段階から描いており、2010 年には「インテリジェント・プラネットの実現」というビジョンを掲げた。それはグローバル市場において IoT ビジネスに舵を切ったことを意味していると同時に（ハードウェアの）「プラットフォームビジネス」で勝負することをビジョンとして内外に明確に示したものである。

さらに彼はその実現を 3 段階に分けると同時に、各段階において取り組むべきことを明確にした。具体的には、第 1 フェーズで、その基盤となるハードウェアを拡充（組み込みハードウェアプラットフォーム）し、2015 年～2016 年にかけて始まった第 2 フェーズでは、ソフトウェアとハードウェアを融合した IoT SRP (Solution Ready Platforms) に力を入れ、そして、2025 年以降（第 3 フェーズ）は大規模 SI によって提供されるドメインにフォーカスした「IoT クラウドサービス」を実現する、といった具合である。

現在、Advantech は、図 2 のように、IoT の構成を 4 つの段階（データ収集、データ伝送、データインテグレーション、データアナリティクス）

図 2 Advantech の IoT のポジショニング



出所：Advantech Japan より提供

に分類し、それらを実現する手段として、インターネット/クラウドサービスとモノ（センサー/デバイス）をあげているが、Advantech のビジネスは、データ管理やデバイスコラボレーションを通じたデータ収集とデータ伝送の領域を主としており、この事業領域以外の企業は基本的にお客様や IoT を促進するためのパートナーとして捉えている。つまり、収益を争うライバルではない。

(2) 企業理念と企業文化

企業理念や企業文化もまた、企業の発展に大きく寄与している。特に企業理念は、京セラ稲盛和夫氏の「利他の思想」に大きく影響を受けており、自分たちや株主だけでなく、全てのステークホルダーが享受する価値を提供することに重点が置かれている。また、同氏のアメーバ経営の大きな特徴である「部門別の採算制度」「人材の育成」「全員参加経営」に倣い、RBU (Regional Business Unit) を独立採算制とするとともに、社員の潜在能力を信じ、挑戦することの大切さを常日頃から説いている。

このような考え方は、稲盛和夫氏の影響だけでなく、創業者が二人とも台湾の HP 出身であるということとも決して無関係ではないだろう。HP には仲間を信じ、壁を取り払い、夢に挑戦する風土が根付いているからである。

なお、Advantech は、グローバルに M&A を行いながら成長してきたが、買収した企業に対しては、その独立性を維持しながら、Advantech ファミリーとして、これらの企業理念や企業文化を適用している。

8 アメーバ経営とは稲盛和夫氏が考案した管理会計手法。

9 日本 HP ウェブサイト「HP の理念」<http://www8.hp.com/jp/ja/jobsathp/working-at-hp/hp-in-country-jp.html> より。

(3) 設立当初より海外展開を目指す

2010年にKC Liu氏が「インテリジェント・プラットフォームの実現」というビジョンを打ち出したことは先に述べたが、実際、台湾は市場規模として他国と比較し小さいため、設立した当初より地球規模（グローバル）におけるビジネス展開を意識していた。このことも主な成功要因の一つであろう。

Advantechのグローバル展開は、1987年、アメリカのサンフランシスコ支社の設立から始まった。その後、1993年にドイツのデュッセルドルフ、フランスのパリ、イタリアのミラノに相次いで支社を設立したことを皮切りに、欧州へ本格的に進出し、2003年にはAdvantech Europeを設立した。さらに、1992年には中国北京に進出し、2003年には昆山市に製造工場を建設したことで、中国本土におけるビジネスに拍車がかかった。現在、中華圏市場（中国、台湾）におけるビジネスは、総売上の約30%を占めるまで成長している。2017年現在においては、Advantechは全世界で23ヶ国、93都市に展開し、名実ともにグローバル企業となった。

(4) パートナーシップの積極的な活用

インターネットの発展には、第1の波（インターネット黎明期：1985年～1999年）、第2の波（アプリ経済とモバイル革命：2000年～2015年）、第3の波（あらゆるモノのインターネット〈IoT〉（2016年～））があると言われ、特に第3の波においては、第1の波と同様、戦略的なパートナーシップの活用が、ビジネスにおける成功の鍵となる。¹¹

そのため、IoTビジネスを牽引するAdvantechは、これまで多くの関連企業との提携を摸索し実現してきた。例えば、複数社と連携するセンサー・プラットフォームのオープン企画のM2.COMの取り組みやインテル社のIoT Solutions・アライアンス・プレミアパートナー、マイクロソフト社のIoTバリュード・パートナーとしての認定はその証左である。

Advantech Japanに限って言えば、2016年、ソフトウェアプラットフォームのSoft Layerと日本IBMのPaas「Bluemix」「SoftLayer」との連携、2017年、京セラコミュニケーションシステムとIoTアプリケーションにおける「SIGFOX（シグフォックス）」¹²の普及を目的としたセンシングプラットフォームの提供における戦略的パートナーシップの締結、三菱電機のe-F@ctory Alliance（イー・ファクトリー・アライアンス）への加盟、無線技術とAI開発に強みがある日本ラッドとインダストリアルIoT分野における協業（日本初のWise-PaasとIoTのアライアンス）等があげられる。

このようにAdvantechは、テクノロジーイネイブラーとして、パートナー企業の製品と自社の製品を適切に組み合わせ、最新技術を埋め込んだシェアリングプラットフォームを構築することで、IoTビジネスにおいて必要なバリュー（価値）をクライアント（SIer等）に提供している。そして、第3の波において必要不可欠な戦略的パートナーシップを実践しながら、クライアント企業の垂直統合の程度に合わせて、彼らに新規ビジネス創造への積極的な挑戦を奨励し続けている。

10 中国の昆山の製造工場はIndustry4.0を具現化する工場でもある。

11 Case, Steve.(2016) The Third Wave: An Entrepreneur's Vision of the Future, Simon & Schuster. (加藤万里子訳『世界経済を変える「第三の波」が来る サードウェーブ』ハーパーコリンズジャパン、2016年) p17より。

12 災害の発生等により電気供給が止まった際、普通のWIFIだと利用が不可能になるため、その代替情報通信網として期待されている。Advantechと京セラは2020年までにNPWA100万台を世の中に流通させることをコミットしており、その実現後、市場でそれを基盤としたサービスが展開されることが期待される。

(5) ブランド力向上に資するビジネス戦略

Advantech は、2016 年の Interbrand 台湾版において、総合 6 位（B2B 部門に限っては 1 位。総合 10 位以内において B2B 企業は Advantech のみ。）を獲得する等、今や台湾を代表する企業として、最もブランド力を有する企業のうちの一つとなった。設立以来、一貫してブランド力の向上を目指してきたこともまた、今日の成功要因の一つである。これは、Advantech の二人の創業者、KC Liu 氏と Chaney Ho 氏の尽力によるところが大きい。

具体的には、ビジネス戦略として、鴻海精密工業のビジネスモデルである EMS（Electronics Manufacturing Service）を一切行わず、主に大手企業を対象としたより付加価値が高い DMS（Design Manufacturing Service）と Advantech 製品（Advantech ブランド）に特化したことである。これは、Acer の Stan Shih Chen-Jung 氏が描いたスマイルカーブ¹³で言えば、左に Advantech 製品、中央に EMS、右に DMS ということになる。このビジネス戦略の徹底と二人のキャリアを基盤とした卓越したマーケティング戦略によって、Advantech の名が市場に徐々に浸透していき、結果として、「産業コンピューター、グローバル IoT プラットフォームを提供する企業」として、信頼性のあるブランドに繋がっていった。現在はその高いブランド力を梃にし、IoT ビジネス市場の更なる拡大を目指している。

(6) セクター制と迅速な意思決定

今日の技術革新のスピードは極めて速い。その為、企業はビジネス戦略の立案及びそれに基づく

13 スマイルカーブとは、電子産業や産業機器分野における付加価値構造を表す曲線で、Acer の Stan Shih Chen-Jung が提唱。価値連鎖の真ん中にある製造と組立の付加価値が最小で、両端の R&D と販売・アフターサービスが最大となる。

組織構築という点において、市場の変化に対して柔軟かつ迅速に対応する必要がある。そのため、グローバル企業はまず、本社と子会社間の役割・権限を明確化し、さらに、良質かつ密なコミュニケーションが可能な環境を構築しなければならない。

Advantech Japan は Advantech がグローバルに展開する RBU（Regional Business Unit）の一つである。マイク小池社長はその肩書きの通り CGM（Country General Manager）であり、Advantech の日本法人を牽引する責任者である。しかし、同時に日本市場における「エンベデッド IoT グループ」の責任者（セクターヘッド）でもあり（日本法人にはその他、「インダストリアル IoT グループ」、「サービス IoT グループ」のセクターヘッドがいる）、台湾本社を含む海外の現地法人の「エンベデッド IoT グループ」と連絡を密に取り合いながら、業務に従事している。

つまり、Advantech は、基本的に RBU 単位ではなく、むしろ、セクター単位で組織が動いており、Advantech Japan は Advantech がグローバル市場で展開しているエンベデッド IoT ビジネスの一つに組み込まれている。各セクターにおける大きな方針は台湾本社で決定されるが、その方針を実現するためのビジネス戦略については、基本的に市場を熟知した各 RBU のセクターに権限移譲されており、市場の変化に迅速かつ柔軟に対応することが可能な組織体制となっている。

とはいうものの、各セクターヘッドは台湾本社にいるセクターのトップと普段から、担当するお客様に関して、英語で E メール等を通してコミュニケーションを密に取っており、リアルタイムで指示や助言を受けているという。「KC Liu 社長はまめに時間を取り、折を見ては声を掛けてくれる。社長のこういった姿勢は、オープンカルチャーを生み、ビジネスに良い影響をもたらす。是非日本でも実践したい。」とマイク小池社長は語った。

これまで Advantech の企業概要及びここまで発展してきた6つの成功要因について述べてきたが Advantech の成功要因は決してこれら6つに限定するものではない。特に日本法人については、2012年に社長に就任したマイク小池社長のこれまでのキャリアとマネジメントスキルによるところが大きいことは明白である。そこで、次章ではまず、マイク小池社長の経歴を概観し、その後、マネジメントを行う上で必要不可欠である社員の育成に関して、マイク小池社長の考え方を紹介したい。

3. マイク小池社長とグローバル人材育成

(1) キャリア等

マイク小池社長は大学を卒業後、アルプス電気に入社した。そして、1984年に渡米しMBAを取得した後、米国インテル社に入社。今日のキャリアの基礎を築いた。1990年には米国アダプテックに移り、同社の日本法人及び韓国法人の設立に関わった後、日本及び韓国のセールスディレクターに就任。その後は、アジレントテクノロジー社、ソニックウォール社等、世界最先端の企業が群雄割拠するシリコンバレーにて、着実に技術とマネジメントスキルを磨きながらキャリアを重ね、2012年1月、台湾の Advantech に入社した。そして、同年、7月に同社日本法人の社長に就任し、現在に至っている。マイク小池社長によれば、2011年の12月にアドバンテックデザインフォーラムに参加した際、当時の President Chaney Ho 氏が提示した未来を予想する一枚のスライドを見て感銘を受け「自分はここで活躍するんだ」「この企業は自身のキャリアを最も活かすことができる」と心から思い、Advantech に入社することを決意したと言う。

マイク小池社長のキャリアは、まさに IT の発展時期と重なる。例えば、1980年代はイーサネット規格の公表、DNS の誕生、com ドメインの登

録、HTML の概念の提案が行われた時代である。1990年代は、インターネットの黎明期であり、世界発の Web サイトの誕生、HTML のバージョン 1.0 の公開、Yahoo やアマゾンの創業、そして、Netscape、Java、Internet Explorer 等が続々と登場し、Google も法人化した時代である。さらに、2000年代はインターネット上でアプリケーションを活用したビジネスが活況を迎えた時期である。

このように、1980年以降、急速に技術革新が進んだ時代において、マイク小池社長はシリコンバレーでキャリアを積み、変容する IT 業界の中心で仕事をしてきた。いわば、マイク小池社長は、IT 業界の生き証人であると言っても過言ではない。つまり、マイク小池社長がこれまでのキャリアで経験してきた全ての know-how や know-who 等が今日の Advantech の躍進の大きな原動力となっているのである。

(2) 真のグローバル人材とは

マイク小池社長は、2011年に Advantech Japan の社長に就任すると、Embedding Business のセクターヘッドとして急激に売上を伸ばすと同時に、2012年より、Elite100という若手社員を対象としたグローバル人材育成プログラムを加速させた。これはグローバル企業において働く上で必要な知識、スキル、マインド等を、若手社員に対して教え、グローバル人材としての底上げを図るものである。このプログラムは、「企業である以上、どのような人材であっても一定レベルに達する必要がある、利益に貢献して欲しい」というマイク小池社長の考えと符合している。

マイク小池社長によると、真の意味でグローバル人材になるためのプロセスには、2段階（フェーズ1とフェーズ2）あると言う。そして、「全く海外で仕事をしたことがない新入社員であっても、フェーズ1のレベルまでは誰でも到達する。

しかし、フェーズ2に達するには、自分で考える力がないと難しい。なぜなら、どんなに知識があっても、また方法論を習得しても、それを現場で発揮するには、結局のところ、リーダーシップ、仕事に対する絶え間ない好奇心、最後までやり抜く力（逃げない）、人を裏切らない力、信頼感、誠実さ等、個人の資質に帰結することが多いからである。」と語った。さらに、マイク小池社長は、それらに加えて、米国の友人を例示しながら、「成功している人は、忍耐力とコミットメント力がある。」と述べた。

このような内面的な資質や精神を鍛えることはグローバル企業で働き、グローバルビジネスに従事するには必要不可欠であり、筆者も大いに共感を覚える。しかし、マイク小池社長は「残念ながら、日本ではこのような教育を受け、現場で活躍している人は圧倒的に少ない。決してグローバル人材は英語ができるかどうかではない。」とも述べ、日本の教育界を含むこれまでの若手のグローバル人材育成方法に対して警鐘を鳴らした。

更に、マイク小池社長はインタビューの終盤において、「台湾企業には日本でいう「大和魂」がある。台湾企業で働き、また創業者の二人と仕事

マイク小池社長と筆者ら



出所：Advantech Japan 東京本社にて撮影

をしていて、心からそう思う。日本人も今でこそ失われたと思われる明治時代の精神を見習うべきではないだろうか。日本企業と台湾企業の相性は良い。一緒にチームになれるメンタリティは日台にはある。」とやや語気を強めながら、今後の若手社員に対する期待を述べた。

4. おわりに

IoT、AI、ロボット等、昨今の技術進歩は目覚ましい。そのスピードはとどまる所を知らず、今後、私たちの生活と職場環境は、短時間で劇的に変化していくだろう。しかし、日本企業は新産業育成やグローバル化という点において、他国に遅れをとっており、このままだと、市場における国際競争力を失いかねないことは先述したとおりである。今後はこれまで以上に、様々な分野のプレイヤーによる参入とリスクを取った挑戦が望まれる。それら無しでは、イノベーションの加速度的な普及は望めないからである。

ここまで述べたように Advantech は、台湾の林口に Industry4.0 を具現化するインテリジェントキャンパスを構築するなど、IoT 市場において、テクノロジーイネイブラーとして牽引してきた。今後、その役割の重要度は確実に増していくだろう。

同社日本法人のマイク小池社長はインタビューの終盤、「これから、技術革新がますます進んでいくと思われるが、今こそ、IoT というコンセプトを実現するにはどうあるべきか、人と技術進歩のバランスが最も大事である。」とも述べ、企業は経済合理性を追求するだけでなく、倫理的な視点、特に人間とテクノロジーとの関係性について考えながら、社会と一緒に発展していかなければならないことを示唆した。最新のテクノロジーは国境を越え、これからますます広がっていく。Advantech はその主役であるがゆえに、将来を担う若手社員には、高い視座に立ち、技術だけで

なく、倫理観を含めて人間的に優れたグローバル人材に育てて欲しい、というマイク小池社長の心からの願いから発せられた言葉であると推察する。

さらに2017年より、Advantech Japanでは、日本の地域をIoTで活性化することを目的とした「Advantech IoT47プロジェクト」を開始し、マイク小池社長自らが、地方47自治体に出向き、各地域でセミナーを行う予定である。少子高齢化が進む日本にとって、地域産業の活性化は大変重要である。この「地方×IoT」という画期的なプロジェクトにより、「グローバルの実現と地域活性化を実現したい」というマイク小池社長の強い願いが、地域産業のイノベーションを後押しするに違いない。

Advantechの「インテリジェント・プラネットの実現」への挑戦。それは人間とテクノロジーの共生への挑戦でもある。今後もIoT市場を牽引するAdvantechの取り組みに注目していきたい。

<参考文献>

[1]Advantech Corporate Guide

[2]Advantech 2016 Annual Reports

[3]Case, Steve.(2016) The Third Wave: An Entrepreneur's Vision of the Future,Simon & Schuster. (加藤万里子訳『世界経済を変

える「第三の波」が来る サードウェーブ』ハーパーコリンズジャパン、2016年)

[4]財務省(2017)「平成28年本邦対外資産負債残高統計」(5月26日付)

[5]首相官邸(2017)「未来投資戦略2017」、
http://www.kantei.go.jp/jp/headline/pdf/seicho_senryaku/2017_honbun1.pdf
(2017.10.10 アクセス)

[6]総務省(2016)「平成28年度版情報通信白書」第1部 特集IoT・ビッグデータ・AI～ネットワークとデータが創造する新たな価値～第3節(3)、
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h28/html/nc123330.html>
(2017.10.8 アクセス)

[7]台湾經濟部投資審議委員会(2016)「105年1月核准僑外投資、陸資來臺投資、國外投資、對中國大陸投資統計」

[8]内閣府(2017)「日本経済2016-2017 -好循環の拡大に向けた展望-」第2章 第1節 第4次産業革命のインパクト、
http://www5.cao.go.jp/keizai3/2016/0117nk/n16_2_1.html
(2017.9.26 アクセス)

[9]日本HPウェブサイト「HPの理念」、
<http://www8.hp.com/jp/ja/jobsathp/working-at-hp/hp-in-country-jp.html>
(2017.9.30 アクセス)

台湾茶の歴史を訪ねる 第四回

(4) 東南アジアから旧満州まで
輸出された包種茶の歴史



須賀 努 (コラムニスト / 茶旅人)

もう15年以上も前になるが、香港に住んでいる時、思い立って台北へ行き、台北郊外の茶畑を訪ねようと思った。知り合いの台湾人に尋ねると『取り敢えず動物園まで行って、そこからタクシーに乗れば行けるよ』と言われたのでその通りにした。目的地は猫空という面白い名前だったが、タクシーの運転手と話していると『猫空は観光茶園のある場所で貴方の行くところではない。坪林へ行くべきだ』と言い出し、そのまま車を反転させて坪林へ向かった。

それが包種茶との出会いだった。連れていかれた茶農家で飲んだそのお茶は、かなり発酵度が低く、緑茶かとも思い、またジャスミン茶の変形かとも感じた。それ以来、何度もその茶農を訪ね、農家料理を堪能しながら、その不思議なお茶を味わっていった。ただ包種茶と烏龍茶、いずれも半発酵茶であるのだが、その違いは単純に発酵度の違いだけだと思っていた。そしてその歴史に関心を持つことは全くなかった。



12年前の坪林の茶農家で

福建の包種花茶から台湾の包種茶へ

包種茶とは一体どんなお茶なのだろうか。その製法に関しては烏龍茶と同じ半発酵茶であり、発酵度が低いというのが一般的な違いと解釈されている。作り手に聞くと『現代の製法では烏龍茶が釜炒りを2回、包種茶は1回』という違いだったとも説明もされたが、これは場合によるらしい。基本的な製造工程は同じだが、その細部の作業内容の違いにより、花香が醸し出るのが包種茶の特徴だというのが分かりやすいかもしれない。

元々包種茶は種茶と呼ばれ、それを紙などで方形に包んだことがその名の由来と言われている。現在包種茶は中国大陸にはなく、台湾独自の茶と言われているが、やはりその起源は中国福建にあるようだ。1796年、王義程という人が安溪で開発したと言われているが、その茶は武夷岩茶の製法で作られたとも言われている。武夷茶の製法は釜入りが2回、それを1回にした安溪流の製法をベースに花を付けたのだろうかとも想像してしまいがどうだろうか。いずれにしてもその製法についての資料は現時点ではないという。

1860年代になると清とイギリスによるアヘン戦争の結果、台湾でも淡水が開港され、洋行(外国商人)が茶を求めてやってくるようになった。初めに輸出されたのはいわゆる烏龍茶だったが、1873年、その烏龍茶が乱造で売れ残り、困った商人がこの在庫を福州にもっていき、花香を交ぜたのが包種茶の始まりだと書かれている本もある。ただこれらの茶は包種花茶と言った方がよいかと思う。因みに福州は当時、中国で唯一ジャスミン茶を製造している場所であったことも大いに関係していると考えられる。

この包種花茶が意外や人気となり、1881年には福建同安出身の呉福源（呉福老ともいわれる）が台北でこの茶の製造・販売を始めるために源隆号という店を立ち上げた。また王安定、張古魁も建成号を興して、台湾での製造が始まった。この頃は中低級の烏龍茶と花を交ぜて包種花茶と呼んでいたともいうが、烏龍茶で花の香りがすれば包種茶と言っていたのかもしれない。

そして1885年頃、福建の安溪（鉄観音茶の産地）から王水錦と魏静時の2人が相次いで台湾にやって来た。彼らは台北郊外の南港大坑で、我々が現在包種茶と呼ぶ、花をつけるのではなく、花の香りが自然に醸し出される茶の開発に成功した。それにより、包種茶は台湾茶として世に出て行くことになる。ただそれは既に日本統治時代に入った1910年代の出来事だったと一般的には言われている。

因みに中国大陸、特に福建から台湾に渡って来た人々は、まずは平地に居を構え、農業に従事した。淡水に上陸した人々は現在の汐止、南港に定住した。中には安溪あたりから茶作りの経験のある者も来ていたらしい。現在包種茶の産地として有名なのは坪林だが、その発祥地は南港・汐止、その次が石碇である、というのがほぼ統一された見解である。

包種茶の発展と郭春秧

1895年に日本統治が始まり、中国大陸との交流が制限され、それまで厦門などを經由して輸出されていた台湾茶は、台北の大稻埕に居を構えた茶商たちによって輸出されるようになる。烏龍茶はアメリカ市場が中心だったが、包種茶の輸出先は東南アジアが中心だ。その輸出には華僑が大きく関わっている。

特にオランダ領インドネシア（蘭印）への輸出が多かった初期、その輸出ビジネスに大きく関わった男がいた。郭春秧、彼は福建同安の貧しい



茶葉が輸出された大稻埕

出身だったが、10代で叔父を頼って蘭印へ渡り、その後砂糖ビジネスで大成功を収め、南洋4大砂糖王の一人とも呼ばれた。そして1887年にはすでに包種茶に商機を見出し、大稻埕へ進出、錦祥茶行を開業した。2017年4月号の中で既に紹介した東邦紅茶の創業者、郭少三の父、郭邦彦はこの錦祥茶行で支配人を務めている。



インドネシアに輸出されていた頃の包装

※2017年4月号P15の文中に『郭家は少三の祖父、郭春秧が・・・』と記述したが、その後ご遺族より『郭春秧と少三は同じ郭姓ではあるが、その姻戚関係はなく、最も信頼できる雇用主と支配人の関係にあったと認識している。但し何の関係もない者をなぜ錦祥茶行の支配人に取り立てたのかという疑問は今も解決していない』との説明を受けたので、ここにお詫びの上、訂正する。

何故初期の包種茶輸出が蘭印中心であったのか、それはこの郭春秧などのインドネシア華僑が有力なルートを持っていたからだろうと推察され

る。また台湾における茶業者の集まりでも、早々に会長を務めていることから、その資力、影響力は十分に発揮されたものと思われる。明治34年(1901年)に包種茶の商標登録を同業15社の代表として農商務省に申請するため出頭したという記録も残っている。但し日本統治が始まると、外国商人と華僑は排除の対象になっており、郭が茶業公会の会長になることはなかった。

ところで香港の北角には郭春秧の名前を取った春秧街という道がある。香港における郭の足跡、功績、そして茶の関りを調べに行ってみたが、何と資料は殆どなかった。香港人は春秧街という名は路面電車(トラム)の終点の地として誰でも知っているが、郭春秧という名を知る者は殆どいない。彼は発電所を作るためにここを開発したが、その後住宅建設に転用したという。その後この地は一時福建系移民が多く、小福建とも呼ばれたが、今は何とインドネシアからの出稼ぎ者が多く住む街になっている。これは蘭印の砂糖王、郭と何か関係があるのだろうか。



香港北角 春秧街

因みに香港には老舗茶荘はいくつもあるが、そこで包種茶というお茶を売っているのを見たことは殆どない。台湾から香港経由で輸出された包種茶もあったはずだが、なぜ香港にはないのだろうか。ある茶商は『香港では包種茶も烏龍茶として売られていた』という。このあたりはどのような

区別がなされたのか、知りたいところだが現時点では不明である。

烏龍茶を上回る包種茶輸出

当初は烏龍茶の陰に隠れていた包種茶だが、1910年代、ちょうど台湾包種茶が開発された頃から、輸出環境が整ってきている。当時茶業金融は厦門などが握っていたが、それが台北に移ってきたこと、また東南アジア向けの直接航路も開通して、輸送が一気に簡単になったことなどが挙げられる。1915年には茶商公会が設立されたが、その会員名簿を見ると包種茶を商うものが多かったことが分かる。1919年には東南アジアで金融を供給するための華南銀行も設立されているが、大株主には当時の台湾一の富豪、板橋の林家など茶業関係者もあり、茶の輸出と銀行設立の関係も何となく窺われる。

そして1920年代、総督府の肝いりで文山地区において春と秋の年2回、高齢の王水錦と魏静時の技術を継承するため、包種茶製造講習会が開かれており、多くの茶農がここで学び、包種茶の生産量を伸ばしていった。売れるようになれば品質も向上していく。これらにより、20年代には包種茶の輸出量は烏龍茶を上回るようになる。尚王水錦は高齢で目も悪く、1924年に亡くなっており、魏氏が得意とした(開発したか)清香式が一般化し、今の包種茶に至るとの説があるのは、これには異論もある。



文山に残る茶業指導所

その後包種茶のニーズが増え、製法が普及していくと、台北付近のみならず、桃園、新竹、苗栗などでも包種茶生産が盛んになったようだ。先日新竹の横山郷に行ったが、1930年代に『横山包種茶』と書かれたポスターが残されているのを発見して、驚いた。実はこの付近で作られた包種茶の品質は当時新竹周辺で一番良かったとの話もあり、今では思いもつかないが、相当の生産量があったと考えられる。



横山包種茶のポスター

ただ『当時新竹では関西紅茶が名を成していたので、対抗上横山包種茶を宣伝したのかもしれない。何故ならこの地で作られた包種茶は苦勞して大稲埕まで運ばれたが、その多くは原料茶であり、ブランド化されるものではなかったはず』との意見も聞いた。確かに現在の坪林を見ても、北部だけでは大量輸出するほどの茶葉は産出されないように思われ、大稲埕の茶商により文山と新竹の茶などがブレンドされて輸出されたのだろう。あのポスターは各地域の役所の対抗意識からできたものかもしれない。

ただ1929年に始まった世界恐慌は蘭印の経済も揺るがしていき、茶の輸入課税が強まるなど、輸出が激減してしまう。またその頃には包種茶輸出をけん引してきた人々の世代交代が進み、これまでの蘭印から日本の管轄下に入った満州への輸

出が伸びていく。これは中国から満州が切り離され、日本統治下の台湾の輸出に優位性が出た結果でもある。当時大連などには台湾の茶業者の支店が開かれ、茶の売り込みが活発だった。1937年の盧溝橋事件以降は、満州への中国茶輸入は全面禁止となり、更に包種茶需要が高まった。そして1941年以降の台湾茶は輸出先が無くなった紅茶ではなく、満州向け包種茶輸出に収斂されていく。

一方東南アジアでは1935年頃にタイとベトナムへの輸出が増えている。総督府は茶の輸出を奨励し、輸出補償法を制定する。これは茶葉輸出で損失が発生した場合、その60-70%を総督府が補てんするという貿易保険のようなものだろうか。このような政策もあり、茶の輸出量は積極的に手掛ける茶商が増えた。

尚今回の調査の中で、1920年以降、台湾茶商で沖縄に支店を出していたところがあることが分かった。元々沖縄ではさんぴん茶と呼ばれるお茶が一般的に飲まれているが、これはいわゆるジャスミン茶、それも低級な香片茶の発音が訛ったものと思われる。ジャスミン茶はそもそも福建の福州で作られていたもので、琉球の朝貢の窓口であったこともあり、この茶が伝わったと考えられる。

戦時体制下に入ってくると、中国大陸からの茶葉の輸入が難しくなり、代わりに台湾の包種茶が沖縄に輸入されていたのではないかと推測される。ただこの茶が低級茶の花をつけたものなのか、自然の香りのものであったのかはよくわからない。これは満州へ運ばれたものについても同様の疑問が残っている。

タイと包種茶の繋がり

坪林で1921年に創業された老舗の祥泰茶荘の第3代、馮明中氏は『昔はタイへの輸出が多かった』と話す。『タイは特に潮州系と客家系の華僑が多く、包種茶は好まれた』ともいう。また『タ

イは僧侶が多いが彼らも包種茶が好きだった』と話す関係者もいたが、現在のタイ僧侶事情に詳しい知人によれば『少なくとも包種茶という名前は聞いたこともないし、そもそも寺で茶が飲まれることはあまりない』と説明された。



祥泰茶荘の馮明中氏

バンコックのチャイナタウン、ヤワラーを歩いていると、茶荘に南港茶と漢字が書かれているのが、目を惹き、思わず中に入って、このお茶を買った。だが店番のおばさんは『これは台湾の茶ではないよ』と素っ気ない。恐らくは昔は台湾から輸入していたが、今ではタイ国内で生産しているのではないかと推測する。微かにブランドだけがタイと包種茶の繋がりを示している。

そういえば、やはりヤワラーにある三馬牌はタイではどこでも売っている有名な茶だが、台湾では宝記と呼ばれ、かなり深い繋がりがあるようだ。台湾のある茶商は『今年から宝記への輸出を再開したよ』と言っており、その昔はかなりの輸出量があったことを窺わせ、その歴史は日本の敗戦後も続いていくことになる。



バンコックで今も営業する三馬茶



バンコックのチャイナタウンで売られていた南港茶

包種茶は烏龍茶と同じとこれまで考えてしまっていたが、今回の調査で少なくとも台湾では完全に独立したカテゴリーであることがはっきりし、またその輸出量も台湾茶業をけん引するまでになっていたのは、驚きだった。次回は光復後の包種茶について、触れてみたい。



73年前に作られた包種茶

日本語パートナーズ《台湾第一期》 活動のご紹介 (3)

日本台湾交流協会では、2017年2月より、台湾での日本語教育を一層充実させるため、独立行政法人国際交流基金の委託を受けて「日本語パートナーズ」台湾派遣事業を開始しました。日本語パートナーズは、主に台湾の高校で授業で授業を行っている台湾人日本語教師のティーチングアシスタントとして、発音や会話のサポートをしたり、日本文化を紹介したりして、先生や生徒、さらには地域の人たちと交流を深めることができるほか、自身でも現地の文化や言葉を学ぶことができます。この度、台湾一期として2017年2月から6月まで約5ヶ月間台湾へ派遣した5名のパートナーズの、台湾での活動所感を、10月号に引き続き2名ご紹介致します。

パートナーズ体験記

日本語パートナーズ 台湾1期

川谷 紗知子

はじめまして。日本語パートナーズ台湾一期として台中市に派遣されておりました川谷紗知子です。

台中でのパートナーズ活動

派遣されるまで台中市がどんな所か全く分からず、以前行ったことのある日月潭のあるところかなという知識だけでした。実際日月潭があるのは南投県と知って、台中について何も知らないまま活動が始まりました。

わたしが派遣された豊原高級中学では日本語の授業は毎週木曜日に開講されています。日本語を勉強しているのは1年生で、元気がよく賑やかで木曜日に来るのがとても楽しみでした。授業のある日は10時から昼休みを挟んで6時間連続で同じ内容を教え続けているので、最後のクラスの授業時にはクタクタになっていることもありました。同じ内容を教えていると言っても、クラスの雰囲気はそれぞれ違うのでおもしろいです。

授業ではカウンターパート（ペアを組んで教えている台湾人の日本語教師、以下CP）が主に授業を進め、わたしはアシスタントとして授業に

参加しています。プリントを配ったり、板書をしたり、会話練習の相手役をしたり。時には文化発表を任されて、写真や動画を見せながら日本の文化やわたしの故郷について紹介したりしました。

CPは長年日本語を教えていらっしゃる先生で、生徒たちが日本のどんなことに興味を持っているか、どんな日本語を知りたいと思っているかなど私の知らない「台湾の高校生の日本語事情」を把握しています。そんな先生が授業を担当していることもあり、先生の話に耳を傾け、面白いときには大爆笑し、気になるところがあればすぐに質問する生徒たちの姿を見て先生と生徒たちの間の信頼感や仲の良さを感じました。



巡回校

豊原高級中学のほかにも週に一回台中市内にあ

る西苑高級中学でもパートナーズ活動をしていました。こちらの学校では2年生が日本語を勉強しており、派遣校とはまた違った雰囲気です。週一回の巡回がとても楽しみでした。

西苑高中には近くに大学があり、語学留学生が出身国の紹介をしに来校する機会もありました。そんな立地ですから日常生活の中でも日本人と関わる機会が多いのではないかと考えていましたが、ある日の休憩時間にひとりの生徒が「初めて日本人と話しました」と声をかけてくれました。日本の情報や日本製品、日本人で溢れている台湾でわたしが派遣される意義は何かと思っていましたが、このような生徒たちとコミュニケーションを取ることにより日本や日本人を身近に感じてもらえることがわたしが台湾で活動する意義なのだと気づきました。

CP との日本語授業

台湾に派遣される前は「CP が長年教えてきた中で一体わたしはどんな活動ができるだろう」「邪魔にならない程度に…でも、わたしらしい活動もしたい」という思いでいました。実際活動を始めてみると、「発音をお願いします」や「これを書いてもらえませんか」など明確に指示を出してもらえたので初回の授業から積極的に授業に参加出来ました。時には一緒に授業で使う文字カードや絵カードを作ったり、例文を考えたりしました。どうやったら生徒たちが楽しく日本語が勉強できるか、日本語に興味を持ってもらえるかがCP と



わたしの一番のテーマでした。

文化発表ではCP が一通り説明した後にわたしが発表をします。例えば「ひな祭り」を紹介した時には、わたしの実家のひな人形の写真を飾り付けている様子が見られるものも踏まえて見せました。その写真を見て生徒たちが「ひな人形はどこに飾りますか」「ビンゴですか」「ひな人形を飾るのは簡単ですか」「よく(ネットやテレビで)見るひな人形は一つの部屋に一つしかないのに、どうして先生の家にはいくつもあるのですか」など質問をしてくれます。インターネットとは違い日本人に直接聞くことができますし、わたしも自分の家のことなので簡単に答えることができます。生徒たちが積極的に質問をしてくれるお陰で深みのある授業になりました。日本人の生活や最新の日本の情報に関しては日本人の方がよく知っているとCP も思ってくださっていたので、その点はわたしが担当し、日本語パートナーズとしてのわたしを上手に活用してもらえました。

職員室の先生方との日常

授業のない日はほとんどの時間を教務室で過ごしていました。学校には外国人はわたし一人だけだったので、台湾人の先生方に囲まれて一体どんな毎日になるのだろうとワクワクしていました。

先生方はとても親切で中には「おはよう」「これは本です」などの簡単な日本語が話せる方もい



らっしゃいました。教務室には休み時間に教務連絡の張り紙を取りに来る係の生徒がやってきたり、教務に用のある生徒がやってきたりと人の出入りが激しく、わたしが日本人とは知らずに教務関連のことを尋ねる生徒もいました。そのたびに教務の先生が「その先生は日本人だよ」と言ってくれるので、わたしが教務室にいることがじわじわと学校内に広まっていきました。

教務室での毎日はとても穏やかで、窓から見える木の上に鳥が巣を作ったときにはみんなでヒナの成長を見守ったり、誰かがパイナップルを持ってきたときにはみんなで食べたりしました。台湾のパイナップルは芯まで美味しく食べられるのだと感動したのを覚えています。台湾人の先生方に囲まれて、自分一人では知ることのできない台湾について知ることができました。

3年生との交流クラス

派遣されて1か月半ほど経った4月から3年生との交流クラスを開講することになり、毎週月曜日と火曜日、約45人の3年生と日本語や日本文化について学びました。

どのようなことが知りたいか体験してみたいかを最初にアンケートで聞いていたので、それをもとに生徒たちと相談しながら活動内容は決めました。挨拶や数字の言い方、ひらがな、買い物のための表現などを一緒に勉強し、それぞれの回に関係のある日本の映画を一緒に見たりしました。生徒たちと一緒に映画を見ていると、面白い場面では声を出して笑ったり、怖い場面では怯えたりと高校生らしい反応が見られてこんな一面があるのだなあと感じました。

この交流クラスでは、わたし自身と生徒たちのコミュニケーション能力が鍛えられたと感じています。なぜなら、生徒の中に日本語が話せる生徒はほとんどおらず、わたしも中国語が出来なかったからです。それでも毎週顔を合わせる中で、日本について聞きたいことや知りたいこと、台湾に

ついて聞いてみたいことが増えていき、身振り手振りや写真や絵、知っている単語などを用いて伝えられるようになりました。

これから大学生になっていく3年生たち。持ち前の優しさと工夫をしながら一生懸命伝えようとすコミュニケーション能力を持ったまま広い世界に飛び出してほしいと願うばかりです。

活動を終えて

あっという間の4ヶ月半の派遣期間を終えて、「あ、台湾、大好き」「もっとみんなと日本語の勉強がしたかった」「もっと台湾にいたかった」という気持ちです。豊原高級中学での毎日はとても楽しく、イキイキと日本語を学んでいる姿にわたし自身もたくさんの刺激をもらいました。いつか生徒たちが日本へ行ったり、日本人の友人が出来たとき、「高校生の時に日本人の先生がいたなあ」と少しでも思い出してもらえたらうれしいです。

4ヶ月半という派遣期間は今思っても短かったなあと思いますが、わたしたち一期の役割は日本や日本語、日本人への興味の種を撒くことであり、新学期から派遣される二期の方々がその種に水や栄養を与えてくれることを期待しています。



基隆市に派遣されて
日本語パートナーズ 台湾1期
斎藤 希美

はじめに

はじめまして。私は2月から4か月半「日本語パートナーズ」として基隆市で活動をしました。学生時代は音楽を勉強し、その後自動車教習所の教習指導員として10年余りを過ごしました。私が勤めていた教習所は外国人教習生がとても多い所でした。彼らが一生懸命異国の地で頑張る姿を見て、それを手助けする喜びを覚えた事は、国際交流に興味を持つきっかけの一つになりました。

その後「日本語パートナーズタイ2期」として10か月間、タイの高校で活動をしました。「日本語教育」について全く素人であった私は、日本語について質問され頭を悩ます事や、「日本語教師」ではない「日本語パートナーズ」としての活動の難しさに悩む事もありました。しかし周りの皆さんに支えられながらかけがえのない10か月間を過ごす事ができました。

帰国後「日本語教師養成講座」に通い日本語教師を目指していたある日、「日本語パートナーズ台湾1期募集」を知り、タイの先生や生徒達の顔がよみがえってきました。そして色々な意味で日本に一番近い外国台湾で、もう一度「日本語パートナーズ」として活動する運びとなりました。

派遣前に不安だった事は、日本語力の高いCPの先生のパートナーとして、そして日本文化がたくさん入り込んでいて、日本語学習経験者が多い台湾で、自分に何ができるのか、という事です。

「日本語パートナーズ」の任務として

- 現地日本語教師のアシスタントとして授業をサポート
- 日本文化の紹介を通じて、派遣先の生徒や地域の人たちと交流

- 現地の言葉や文化を習得
- 活動のこと、現地のことを日本に伝えるという事が掲げられています。以下、私が活動してきた内容です。

現地日本語教師のアシスタントとして授業をサポート

私は台湾で邱先生（女性）と紀先生（男性）の先生のアシスタントとして二つの高校で活動をしました。お二人とも日本語能力試験N1の取得者で、時々日本人と話しているかのように錯覚するほど日本語が上手です。又来日回数も多く、日本文化についてもよくご存知のお二人でした。

授業では、先生とのロールプレイや生徒とのロールプレイ、会話の練習、単語の発音モデル、テスト作成の手伝い等を行いました。

何人か日本留学希望の、日本語がとても上手な生徒がいました。しかし大半は一学期間、週一回だけ日本語を勉強した生徒です。まだ会話もままならないレベルでしたが、一生懸命日本語を話そうとする姿はとても可愛いものでした。

授業外ですが、日本台湾交流協会による台湾の高校生対象の日本留學生の応募に派遣校より3名応募しました。うち2名が一次審査を通過し、二次審査の面接準備の為、CPである紀先生が模擬問題を作成しました。その後生徒と一緒に答え方を考えたり、練習をしました。結果1名が二次審査を通過し、9月に日本に留学予定です。



邱先生とのロールプレイ



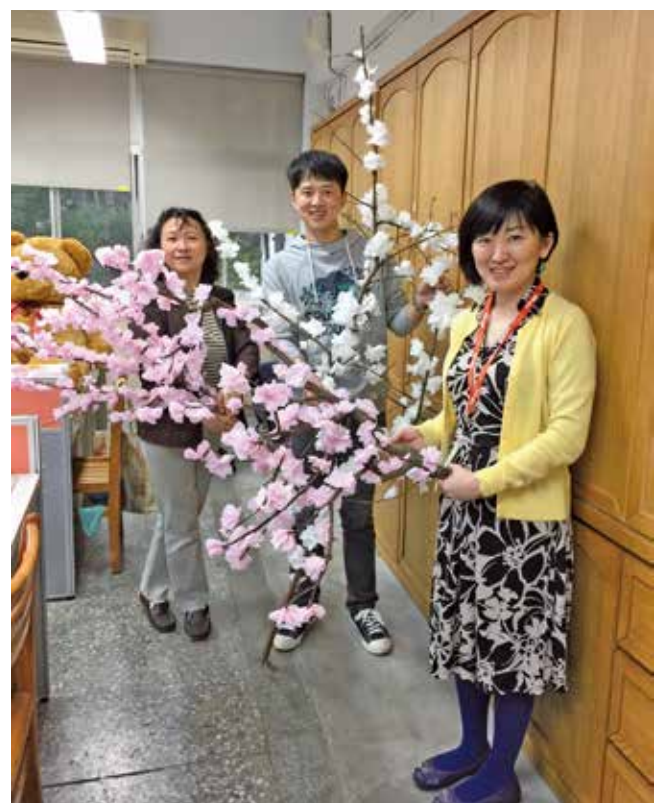
生徒達との会話練習（自己紹介、名刺交換）



日本文化の紹介を通じて、派遣先の生徒や地域の人たちと交流

派遣先の高校では授業、クラブ活動、休み時間等に折り紙、桜、こどもの日、日本の歌、日本の高校、浴衣等の紹介をしました。又、高校の先生方との交流会も週4コマ実施していました。基本的には日本語教室でしたが、かるた、バレンタインデーやホワイトデー、ひなまつり、春分の日等の紹介もしました。天ぷら、ちくわ、野菜、果物等、台湾の食べ物と日本のそのの違いについて質問も多く受け、紹介する機会も多くありました。同時に私も台湾の食べ物についてたくさん知る事ができました。

CPの先生とも授業以外の時間でたくさんの事を話しました。日本の公立学校での結婚事情や、一生餅のお祝い、こどもの日のちまきの味や形の由来、日本のトイレ事情等、日本文化に詳しく、日本留学経験もある先生方でしたが、知らない事も多かったようです。





先生方との交流会最終日



おのおののカップで茶道体験

現地の言葉や文化を習得

現地の言葉や文化は、CPの先生から、学校の先生との普段の会話、放課後や休日一緒に出掛けた時、先生との交流会の中で、生活CPとの会話の中で、休み時間に遊びに来る生徒から、たくさん教わり勉強しました。

又、私が席を置かせて頂いた職員室に在籍していた国語の先生が「言語交流をしましょう。」と仰ってください、週一度、中国語を教わっていました。「大学時代に日本語を勉強した事があるが、忘れてしまった事や知らない事もある。」との事で、時々日本語についても質問を受けました。この先生の息子さんが放課後、学校の職員室でよく宿題をやっていて、彼からもたくさん中国語を教

わりました。こどもの日には新聞紙や折り紙でかぶとを一緒に作りました。数日後、彼が学校の国語の教科書を「ねえ、これ見て。」という感じで私に差し出してきました。なんとそこにはかぶとのような物をかぶった子供の絵が描かれているではありませんか。色々な不思議な感覚につつまれながらもとても感動した事を覚えています。

休日や放課後の時間には、週一回程度、外の語学学校にも通い勉強しました。教科書の中身だけではなく、生活する上での会話や情報、文化についても沢山教えて頂きました。とても良い先生で授業以外の時間でも質問に答えて下さるし、今でも交流が続いています。

同じ住居に住む日本語を話せる方と友人になり、その方のご紹介で、近隣の二胡教室に週一回通いました。先生も他の生徒さんもみな台湾人だったので、色々な事を教わり、日本語の簡単な挨拶も覚えてくれました。

端午節の時には、色々な方から、台湾のちまきについて教わりました。頂いたちまきはゆうに10個を超え、周りの先生から「今日もお昼ごはん、ちまきなの?」と言われていました。おかげでたくさん種類のちまきを味わう事ができました。



二胡発表会

活動のこと、現地のことを日本に伝える

活動のこと、現地のことはSNS、Facebookをつかって発信していました。又一度国際交流基金のホームページ上にある「今月の日本語パート

ナーズ」にも活動の様子を投稿しました。又家族や友人等にも活動や生活の様子を写真を交えながら伝えていました。

帰国した現在も台湾と日本の文化や食べ物の違い等について、折に触れて話しています。今でも台湾の先生や友人、生徒と交流があるので台湾の様子を聞いたり、こちらの日本の様子を伝えたりもしています。

おわりに

台湾は日本文化がたくさん入り込んでいて、日本のテレビ番組も放映されているし、インターネットでも簡単に情報が得られます。派遣前に不

安に思っていた事は活動を続けていくうちになくなっていきました。「日本人」が「日本人」として経験してきたことを「日本人」が語り、表現し、その場で実際に見てもらったり、聞いてもらったり、体験してもらう事は日本人にしかできない「日本語パートナーズ」の大切な役目だと感じました。

台湾の方はみなとても親切で、多くの優しさを頂いて帰国しました。この恩返しが少しでもできるよう、台湾と日本の絆をもっと近づける架け橋となれるよう、精進していきたいと思います。

帰国しましたが、「日本語パートナーズ台湾一期」としての活動はこれからも続きます。



同じ職員室の先生。台湾の素麺をゆでてみんなで食べた日



私に中国語を教えてくださった国語の先生



先生の息子さん



片倉佳史の台湾歴史紀行 第七回

高雄 (7)

—南沙 (スプラトリー) 諸島の歴史

片倉 佳史 (台湾在住作家)



台湾南部最大の都市である高雄市。その管轄地域は、海の前にも存在している。南沙 (スプラトリー) 諸島は東沙島、西沙諸島、中沙諸島と並び、「アジアの火種」と言われている (英語ではそれぞれプラタス、パラセル、マクルスフィールド)。今回は知られざる南シナ海の歴史、南沙諸島と日本の関わりについて紹介してみたい。

アジアの火種となった旧日本領の島

南沙諸島 (英名・スプラトリー諸島) は終戦まで新南群島と呼ばれていた。台湾の南端からさらに南へ約 1300 キロ進んだ先にある島々である。現在は海底油田の存在が確認されており、中国をはじめ、領有権を主張する複数の国家間の係争地域となっている。

ここも終戦までは日本の統治下にあり、高雄市が管轄していた。長島を中心に、北二子島、南二子島、西青島、三角島、中小島、亀甲島、南洋島、北小島、南小島、飛鳥島、西鳥島、丸島などで構成されていた*1。

このうち、長島は群島内最大の面積を誇り、現在は太平島と呼ばれている。中華民国政府が実効統治している唯一の島で、警備隊が常駐している。

また、西鳥島は現在、ベトナムが実効統治している。ベトナム語では「チュオンサ」、中国語表記は「南威島」となっているが、この島の英語名は「Spratly Island」で、「スプラトリー諸島」の呼称はここから来ている。

※1 比較的大きな島は長島のほか、三角島、南二子島、北二子島、西鳥島の五島。長島と三角島には井戸があり、真水を得ることができた。三角島については水を貯え、船に給水を施していたという。



アホウドリの群れ。カツオドリやアホウドリ (信天翁) が憩い、海亀が産卵に訪れる楽園だった。『台湾拓殖会社事業概観』より



長島を遠望。全住民がこの島に暮らした。群島開発と南方進出の拠点として期待された。『台湾拓殖会社事業概観』より

豊富な漁業資源と燐礫石

この海域は長らく無主の状態となっていた。ただし、魚介類は豊富で、カツオやマグロ、トビウオなどのほか、アオウミガメやボタンの材料となる高瀬貝 (サラサバテイラ) などが知られていた。

小舟に乗った漁民たちは自由に出入りしていたが、岩礁が多く、大型船が航行するのは困難を極めた。実際に座礁する船は多く、「魔の海域」となっていた。

そういった状況に変化が現れるのは、日本人が^{りんこうせき}燐礦石の存在を知ってからである。燐礦石は燐酸肥料の原料となるもので重宝されていた。この海域の島々には、海鳥の糞が堆積し、化石化した「グアノ」と燐礦石が豊富に見られたのである。

日本人が進出するようになったのは大正期である。その嚆矢となったのは^{ひらだすえじ}平田末治が西沙島踏査の際に立ち寄ったこととされるが、これについては異説が存在している。

正式な調査は1918（大正7）年末に実施された。ラサ島燐礦株式会社（後のラサ工業株式会社）がこの海域の調査を実施し、その後、群島への進出を決めた。

1921（大正10）年6月にラサ島燐礦株式会社は長島、1923（大正12）年からは南二子島で燐礦石の採掘に着手した。同社は100万円という巨費を投じたが、経済不況のあおりを受け、撤退することとなった。ここで一旦、空白の時間が生まれるが、その後、開洋興業株式会社が開発を引き継ぐこととなる。

大正期に始まる日本人の進出

1918（大正7）年11月23日、ラサ島燐礦株式会社は平田末治の報告書をもとに、探検船「報効丸」を仕立て、東京の月島を出帆した。乗組員は10名で、途中、沖縄で10名の漁夫を雇って総勢20名。隊長は予備海軍中佐の小倉^{うのすけ}卯之助だった。

小倉は後に台湾総督となる小林躋造と同窓で、当時、海軍省にいた小林からラサ島燐礦株式会社（当時は合資会社）の創設者である恒藤^{つねとうのりたか}規隆を紹介される。そして、南洋探検の話を持ちかけられた。この恒藤は後に新南群島の命名者となった人物である。

しかし、この頃は船を探すことがとても困難

だった。結局、隅田川の河口で廃船同様の状態だった船を使用することになった。これは「報効丸」といい、千島列島の探検と開発で知られる郡^{ぐん}司成忠が主宰した報効義会の船だった。老朽船であるばかりか、補助機関のない、とても簡素な帆船だった。

一行は途中、沖縄と高雄に寄港して、12月26日午後北二子島に到達したが、暴風雨に見舞われてしまい、島には到底近づけなかったという。上陸できたのは30日になってからだった^{※2}。

北二子島には燐礦石が見られなかったが、年が明けて元旦に西隣りの南二子島に上陸したところ、ここには夥しい数の海鳥が群棲していた。グアノも見られ、豊富な燐礦石が発見できた。その後、1月8日には西青島に上陸。この辺りは暗礁が多く、この島には、付近で難破した船名にちなみ、ウエストヨーク島という名が付いていた。

1月10日、小倉はここに「占有本島 大日本帝国帆船報効丸乗員一同」と記した木標を立てた。なお、一行はこの島を無人島と思っていたが、漢^{なまこ}人の漁夫3名に会っている。彼らは海鼠や高瀬貝を採っていたという。

その後はチチュ島（後の三角島）、イトウアバ島（同じく長島。現・太平島）などに寄り、二ヶ月にわたって調査を行なった。その後、ラサ島燐礦株式会社は1920（大正9）年11月15日に第二次、1923（大正12）年7月1日に第三次の探検隊を派遣している。

なお、小倉卯之助はこの探検時、62歳という高齢だったこともあり、帰還後、多くの新聞や雑誌が彼を訪ね、その顛末が広く報道されることになった。また、小倉自身が詳細な航海日誌を記しており、これは新南群島に関する最初の記録となった。当時はまだ新南群島という呼称がなかったため、『南洋探検記』とされた。

余談ながら、第三次探検隊の隊長を務めたのは海軍中佐の副島村八だった。副島は出帆の間際に夫人から朝顔の種を渡されたという。新南群島訪

問の記録や文献には、「島には朝顔が咲き乱れていた」という記述をよく見かける。私自身、東沙島を取材した際には確かに朝顔を数多く見かけた。これは副島隊長が持ち込んだ種子が定着したものなのだろうか。興味が尽きないところである。

※2 新南群島までは高雄から約5日を要した。群島の最北端となる北二子島は環礁の上に二つの丘が見えるということで北二子島、南二子島の名が付いた。北二子島は緑に覆われ、後には漁船の給水基地になっていた。



南シナ海の地図。台湾の南端から新南群島までは約1300キロ。新南群島には多くの小島と岩礁があるが、多くは無人島だった。『太平洋二千六百年史』より

新南群島での暮らしぶり

ラサ島燐礦株式会社は1921(大正10)年10月から長島で、12月からは南二子島で燐礦石の採掘を始めた。これが新南群島における日本人最初の事業となった。

一時は200名もの採掘作業員が長島に暮らし、宿舎や棧橋、井戸、トロッコ軌道などが設けられ

ていた。沿岸部には台湾から持ち込まれたパパイヤやパイナップル、バナナのほか、乾燥に強い瓜類が植えられていた。特にパパイヤに関しては、台湾より持ち込まれた直後から、急速に増え、島内にくまなく見られるようになったと伝えられる。

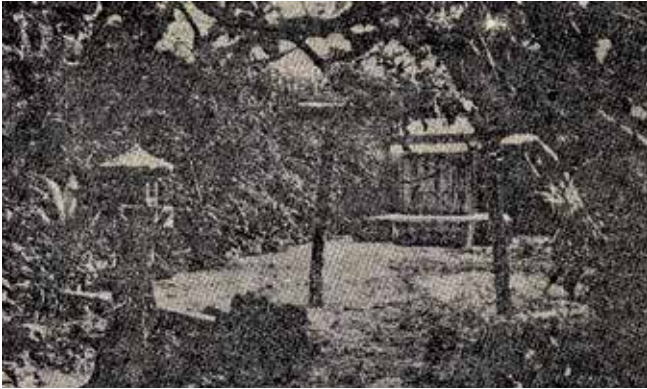
1944(昭和19)年に発行された雑誌『台湾時報』には興味深いエピソードが記されている。島の暮らしはいたって平和だが、海鳥の大群が四六時中鳴きわめいて賑やかだったこと、そして、野鼠が多く、しかも兔のように大きな体躯だったという。これは漢人の船に紛れ込んでこの島に棲みついたものと推測されるが、その駆除に猫を持ち込んだところ、あまりにもご馳走が多かったためか、猫が一年に4度も子を産み、鼠の島が猫の島になってしまったという逸話も残る。また、猛獣の類はいないが、サソリがおり、何人かが命を落としたなど、こちらも興味が尽きない。

また、この島はアオウミガメの産卵地でもあり、5月から6月にかけて上陸する。人々はアオウミガメの肉も食したそうで、すき焼きや味噌煮にしていたという。そして、夜には南十字星を眺めながら、南国情緒を楽しんだという。当時はすでに台湾から持ち込まれた椰子の樹が定着していた。

住民は健康維持にとっても気を遣っていたという。島に来れば、誰もが下痢に苦しむが、それ以上に、この島ではかすり傷でもすぐに化膿するので注意が必要だった。一方で、蚊が棲息しないため、マラリアが存在しなかったことも特筆される。

しかし、繁栄は長く続かなかった。1920(大正9)年、第一次世界大戦後の恐慌の中で、ラサ島燐礦株式会社の業績は悪化。燐礦石を原料としていた肥料の価格も暴落し、同社は1929(昭和4)年4月、ついに撤退を強いられる。施設を残したままの状態、職員たちは本土に引き揚げていった。

その後、事業は台湾の開洋興業株式会社を受け継がれた。同社を率いるのは実業家の平田末治だった。彼もまた、長島に拠点を置き、採掘事業を続けた。



長島に設けられていたラサ神社（後の長島神社）。住民と職員の参拝の便宜を図って設けられた。内務省の神社台帳にはその記載が見られない。『台湾時報』より

フランス軍との接触

ラサ島燐礦株式会社の撤退と平田末治率いる開洋興業株式会社による再出発。その間には5年あまりの空白がある。そこを衝くように、フランスがこの海域に介入してきた。1933（昭和8）年、安全航行のためと称し、フランスが軍艦を派遣し、海域の主権を主張してきたのである。

フランスは北二子島を皮切りに領土石を設けていった。これは「先占」を誇示することを目的とした標柱である。通報艦アレルト号が立ち寄った順に設けられ、最初の北二子島の領土石には1933年4月10日と刻まれた。

フランスは7月25日に一帯の7島、つまり、長島（イトゥアバ島）、丸島（アンボアン島）、西鳥島（スプラトリー島）、北と南の両二子島（ドゥジュール島）、中小島（ロアイタ島）、三角島（チチュ島）の各島とその周辺の岩礁を自国領と宣言した。

これは軍事行動を伴ったものではなく、単なる領有宣言だったと判断できるが、ラサ島燐礦株式会社の撤退で管理者がいなくなった島々に対し、フランスが領土獲得の野心を抱いているということで、日本国内には衝撃が走った。

南シナ海はインドシナを治めるフランス以外にも、フィリピンを治めるアメリカやマレーシアやボルネオ島を治めるイギリスなど、列強の利害が

交錯していた。その後、日本とフランス、そして、強い姿勢を見せることはなかったが、やはり領有権を主張する中華民国の三国間で外交戦が展開されることとなる。

8月19日、日本はフランスの一方的な振る舞いに対し、抗議した。そして、長年無主だったこの島を最初に治めたのは日本人だったこと、自国民が巨費を投じてその開発に当たってきたことを理由に、自国の領有権を主張した。フランスはこれに対し、「民間企業が行なった私的経営は国際法上の先占の概念には含まれない」と反論。産業上の権益は認めるとしながらも、領有権は譲らず、交渉は平行線をたどっていた。

この時、大阪毎日新聞社は自社で船を仕立て、記者二人を特派員として新南群島へ送った。そして、ラサ島燐礦株式会社が撤退し、遺棄された施設などが詳細に記録され、報道された。記事以外にも、同社は9月に『新南群島探検記』という写真集を発行した。これは貴重なカットが豊富に掲載されており、話題となった。

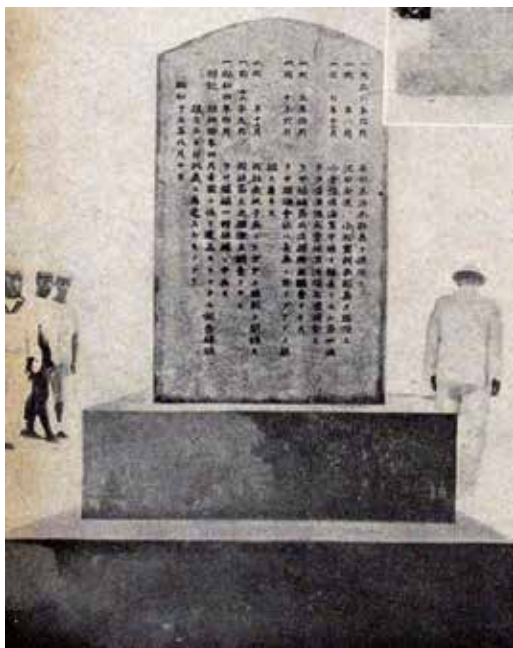
フランスは具体的な行動に出ることはなく、軍事的な衝突もなかったが、西沙諸島に対しても軍艦を派遣し、日本の動きを牽制していた。それでも、交渉は進まず、未解決のまま、時間だけが過ぎていった。

その後、1938（昭和13）年8月10日、日本はコンクリート製の帝国先占碑を建ててフランスに対抗した。そして、1939（昭和14）年3月30日、日本は公示をもって新南群島の領有を宣言した。翌日17時に外務省はこれを発表し、外務次官のさわだれんぞう澤田廉三がフランス政府に通告した。島々と海域は4月18日付けで高雄市の管轄下に入った。

1939（昭和14）年3月31日には高雄神社で新南群島市域編入奉告祭が挙行されている。なお、この領土編入により、日本の最南端（有人地域）は台湾の鵝鑾鼻ではなく、北緯7度の新南群島となり、最西端は東経111度55分55秒の西鳥島となった。



帝国先占碑。『太平洋二千六百年史』によると、日本が最初に先占碑を設けたのは1929（昭和4）年4月だったが、昭和13年に再建された。



石碑の後面には日本と群島の関わりが刻まれていた。

日本編入後の新南群島経営

フランスの「野心」に触れ、日本は南シナ海の拠点としての新南群島の存在意義を再確認するに

到った。

ラサ島燐礦株式会社の撤退によって、一度は遺棄された新南群島だったが、ここに平田末治が進出を決める。平田は1935（昭和10）年の春に開洋興業株式会社を設立。資本金は50万円。社長職に就いたのは鹽水港製糖株式会社の槇哲社長で、平田自身は専務取締役となっている。

開洋興業株式会社はフランスの動きを強く意識していた。同社は台湾総督府と海軍の後ろ盾を得て、積極的に事業を展開していった。その内容は漁船の救助や漁場の監視、気候観測、通信事業といった公益事業を主軸に置いている。しかし、燐礦石の採掘、そして、豊富な漁業資源の管理という部分が大きかったことは疑いはない。

同社は広大な南シナ海を漁場とし、その中枢として新南群島を捉えていた。この海域ではマグロやカツオ、海亀類などが豊富に獲れた。中でも高雄に本社を構える拓洋水産会社は台湾拓殖会社の関連企業だったが、20トン級のマグロ漁船10隻をもって、南シナ海への漁業進出を目論んでいた。

港湾整備は急務とされ、大規模な築港工事が計画された。文献がなく、詳細を知ることはできないが、水深は干潮水面から3メートル、漁船120隻を収容できる規模が望ましいとされていた。

燐礦石の採掘については、開洋興業株式会社から南洋興発株式会社に移管され、長島、南二子島、三角島の採掘権はこちらに移った。同社は南洋方面で手広く事業を展開していた国策会社で、燐礦石についても、すでにサイパンやロタ、ペリリュー、トコペ（トビ）の4つの拠点を持っていた。

台湾総督府も肥料規則を改正し、新南群島と西沙群島（平田群島）に特例を敷いた。当時、グアノは肥料取締法が認める水溶性燐酸でないことを理由に、加工せずに販売することが禁止されていたが、これを見直すというものだった。これにより、南方資源開発の活性化が促進された。



新南群島は一時期、日本最西端の地（西鳥島）でもあった。『台湾時報』より。



(影撮氏治末田平 相林の島長島群南新)

長島には100本あまりの灌木が見られた。水と樹陰を確保するべく、植樹は計画的に行なわれていた。『台湾時報』より。

幻に終わった漁業都市計画

長島は新南群島の拠点として整備された。1939（昭和14）年には長島に都市計画が立てられている。もともと無人島になぜ「都市」計画なのか、誰もが不思議に思うだろう。これは燐鉱石資源が枯渇した後、ここに南シナ海の漁業基地を作るというものだった。

この計画は中央部の4～5万坪の土地を整備するものだった。そこには冷蔵庫や製氷所、水産加工場、漁具庫、漁船修理工場を設ける。さらに、共同浴場や病院、社員クラブ、運動場まで設ける計画だった。

戦況の悪化で、これらの計画は完成しなかったが、住宅や気候観測所のほか、ラサ神社と呼ばれる神社などは整備されていたし、日本が設けた波止場の痕跡は現在も残っているという。そのほかにも、給油施設、通信所、医療施設などは稼働していた。

この計画は3～4千人程度の人口を想定していたと言われ、1940（昭和15）年には台湾総督府がこの計画に対し、予算を計上している。実際に水産業関連の部分については拓洋水産株式会社が、鉱業に関する部分については南洋興発株式会社が資金を投じて整備に当たっていた。



長島の栈橋は島の南岸に設けられていた。現在もその遺構が確認できる。長島は新南群島で唯一、大型汽船が接近できた島だった。『台湾時報』より



開洋興業株式会社の社宅。真水を得られる長島では果物や野菜の栽培ができたという。

新南群島から南沙諸島へ

第二次世界大戦が終結すると、新南群島を取り巻く環境は一変する。敗戦国となった日本は台湾および澎湖地区の領有権を放棄したが、新南群島、西沙諸島、東沙島についても同様に、日本の統治下から離れていった。

1951年9月8日、日本は連合国との間に「日本国との平和条約（サンフランシスコ講和条約）」を結んでいる。その第二章「領域」の第2条（f）の項に「新南群島（スプラトリー諸島）・西沙群島（パラセル諸島）の権利、権限及び請求権の放棄」が記されているが、同条約第2条（b）の「台湾及び澎湖諸島」と同様、具体的に新たな帰属先は明記されていない。これを受け、フランスと中華民国は新南群島に日本が残した施設を接管することに躍起となり、これがきっかけとなって、現在にも続く領土紛争の火ぶたが切られた。

中華民国は新南、西沙、東沙の3群島に「南海諸島」という呼称を与え、1947年にその領有を発表している。後に成立した中華人民共和国は1950年に同じく南海諸島の領有を発表している。また、ベトナム国（当時。サイゴン政府）も領有権を主張した。

戦後、長島は中華民国政府によって「太平島」

と名付けられた。これは1946年10月5日、戦後の混乱期に乗じてフランスが西鳥島と長島に上陸するという事件が起こり、中華民国はこれに抗議。帰属についての協議が実施されることになったが、第一次インドシナ戦争の影響を受け、フランスは会談を放棄した。中華民国は中業号、永興号、太平号、中建号という4隻の軍艦を長島に向け、広州を出たこれらの軍艦は西沙を經由し、12月12日、南沙に到った。

この時、長島の接管に当たったのが太平号と中業号で、その名にちなみ、太平島の呼称が付けられることとなった。同時に日本統治時代の呼称である新南群島の名も使用されなくなり、「南沙諸島」、もしくは英語で「スプラトリー諸島」となった。

太平島は諸島内で最大の面積を誇り、面積は0・51平方キロメートルで、東西に1289・3メートル、南北に365・7メートルと、楕円形をしている。海拔は高い所でも6メートルほどである。

この島は長らく中華民国海軍の管理下にあったが、2000年1月に政府内に海岸巡防署（海上保安庁に相当）が設けられると、こちらに移管された。行政区画としては高雄市旗津区中興里に属している。台湾政府が実効統治する群島内唯一の島であり、海軍陸戦隊と海岸巡防署が人員を常駐させている。

長らく閉ざされた島ではあったが、2016年3月23日に台湾政府は一部の海外メディアを招いて、島内の様子を紹介した。なお、この島は欧米では「Itu Aba Island」と呼ばれている。これは「あれは何ですか？」という意味のマレー語で、国際的な呼称としてはこちらが定着している。



新南群島を特色付けるものとして、海鳥の存在が挙げられる。アホウドリやカツオドリが群棲していた。

太平島は「島」か「岩礁」か

現在、この海域は中国や台湾（中華民国）だけでなく、ベトナムやフィリピン、マレーシア、そして、派兵行動はしていないものの、ブルネイも領有権を主張している。南沙諸島という表現も、中国語であり、フィリピンはカラヤアン諸島、ベトナムはチュオンサ諸島と呼称が異なるため、国際社会では英語名のスプラトリー諸島という表現が広く用いられている。

この中で、最大の面積を誇る太平島（長島）を実効統治するのは台湾（中華民国）である。現在、台湾政府が実効統治するのは太平島の一島のみだが、その意義は大きなものがある^{*3}。それはここが群島内で唯一、人間が暮らすことのできる島だからである。

2016年7月12日、オランダ・ハーグの常設仲裁裁判所は、フィリピンが提訴していた中華人民共和国による南シナ海の領有権主張や人工島の建設が国際法に違反するという案件に対し、中国の主張には法的根拠がないという判断を示した。同時に、人工島は排他的経済水域や大陸棚が認められる「島」ではないと判断を示した。

中国はこれを当然のようにはねつけたが、ここに見落としてはならない問題点がある。フィリピン政府が南沙諸島の島々を、「島」ではなく「岩礁」、「環礁」としていたことである。

これについては、馬英九総統（当時）が2016年3月23日、記者会見で触れている。その内容は、太平島は人間が居住でき、独自の経済生活を維持できるという条件を満たしており、『国連海洋法条約』の第121条、「島嶼」の定義に合致しているというものだった。同時に、太平島の主権は中華民国にあり、12海里の領海・領空のほか、200海里の排他的経済水域（EEZ）と大陸棚を主張する権利があるというものだった。

※3 厳密には太平島の沖合2・5キロの地点に中洲礁があり、ここも中華民国が実効統治しているが、管理はされていない。



長島を遠望。現在は太平島と呼ばれている。緑が生い茂っているのがわかる。

人間が暮らせる島、農業ができる島

台湾政府は太平島を人間が居住可能で、農業もできる土地としている。軍事的拠点であることは否定しないものの、住環境が整備され、医療施設や太陽光発電なども整っている。

太平島には4箇所の井戸があり、真水が得られる。総出水量は65トンに達する。中でも最も水質が良好とされる5号井戸はそのまま飲用でき、一日あたり1500人分が確保できるとされる。

また、台湾政府の発表によると、島内には108種類もの原生植物が確認されているという。「原

生林」の存在でも知られ、樹齢100年の老木が147株あるという。日本統治時代に台湾島から持ち込まれた種子が土着化して繁茂したケースが多いと推測されるが、鬱蒼と生い茂った様子は動画が公開されており、誰でもその事実を眼にすることができる。

自然生態の保護についても熱心な取り組みがなされており、研究者たちが常駐している。中でも、高雄市政府はここをアオウミガメの生態保護区域に指定している。

さらに、この島には農場もあり、野菜や果物が栽培されているほか、ヤギやニワトリなどが飼育されている。現在、島に駐在する人々の食事は、イモや鶏肉、鶏卵、魚、野菜などは現地産のものが消費されている。

先述の馬英九総統の記者会見では、「フィリピン政府は太平島の地理や歴史への認識、研究が不十分なのかもしれない。私は中華民国総統として、裁判官を含め、実地訪問にご招待したい」とも語っている。確かに、太平島の様子を目にすれば、ここが岩礁ではなく、れっきとした島であることは明白である。

周知のように、中華人民共和国は南シナ海を「核心的利益の地」としており、あからさまな進出を図っている。現在、西沙、南沙、中沙をまとめ、海南省に属する三沙市とし、その海域に漁船団を送り込んで操業をしたり、環礁を埋め立てて、軍事拠点としたりしている。

2015年1月頃からは艦船を用いて示威活動を繰り返すようになり、環礁を埋め立て、軍事拠点を建設するという動きがより活発になった。そして、灯台や滑走路の建設を進めた。これに対し、同年10月27日、米国がイージス駆逐艦「ラッセン」を派遣し、中国の動きを牽制したのは記憶に新しい。

2016年1月2日には中華人民共和国がファイ

アリー・クロス礁（中国名は永暑礁）を埋め立てて設けた人工島に3000メートルの滑走路を完成させ、試験飛行の成功を発表した。この島は1988年3月14日に中越間で発生した「スプラトリー諸島海戦」で中国がベトナムから奪取した岩礁である。

揺れ動く国際社会の中で、今後、太平島はどのような運命を歩んでいくのか。目が離せないところである。

今回は東沙（プラタス）島について述べてみたいと思う。



台湾の郵便局の表示・太平島はもちろん、東沙島（プラタス島）や釣魚台（尖閣列島）にも郵便番号が付されている。

参考文献（新聞記事は除く）
 『台湾時報』（台湾総督府）
 『國民地理の實業』
 『太平洋二六〇〇年史』
 『國民地理の本質と実践』
 『暴風の島』（小倉卯之助）
 『アホウドリと「帝国」日本の拡大』（平岡昭利）
 『事業概観』（台湾拓殖会社）
 『南海諸国国際紛争史』（浦野起央）
 『20世紀前半における南シナ海への日本人の関与に関するメモ』（嶋尾稔）
 『古写真が語る 台湾 日本統治時代の50年』（片倉佳史）

台湾ランニング事情第9回

指南宮トレイルレース

石原忠浩（台湾・政治大学日本研究プログラム 助理教授）
（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

今年の台北は9月中旬を過ぎても、38.5度を記録するなど盛夏と呼べるほどの酷暑の日々が続いていた。まだまだ残暑の気配すら感じられない9月末、台北市郊外の木柵指南山麓の野山を駆け巡るトレイルレース「NISSAN Action Asia X-Trail TAIWAN 台湾動感亞洲越野賽」に参加した。（写真は過去の物も使用しています。）

1. はじめに

台北市南部に位置する文山区は、外国人観光客にとっては馴染みの薄い地名かもしれないが、アジア最大規模を誇る台北動物園（パンダもいます）とお茶畑が広がる「猫空」のある界隈と聞けば、「あそこか」と察しのつく方々も多いのではないかと思う。動物園から猫空へは、猫空ロープウェイを利用するのが一般的であるが、動物園駅から二つ目の駅に指南宮駅（標高 264.3M）がある。指南宮は台湾道教の聖地のひとつに挙げられ、日本統治時代の1920年に建立された廟である。外国人団体観光客が観光バスで立ち寄り、日本のガイドブックに載るようなスポットではないかもしれないが、地元では個人参拝客を中心に賑わう場所となっている。

2. レースの概要

主催団体の Action ASIA EVENTS は香港に事務局があり、ウェブサイトによると香港を中心に主にトレイルレースを開催しているが、開催地域の範囲は香港、中国、台湾といった「兩岸」とどまらずシンガポール、タイ、モンゴル、マレーシア、ネパールなどでも定期的にレースが行われている。残念ながら、日本での開催は確認で

きなかった。

同組織は台湾において毎年9月の指南宮のレースの他、11月には台湾北部の水甕の一つ桃園市石門水庫周辺のトレランレース（13,21,50K）を開催している。今回参加した指南宮トレイルレースだが、2010年以降のレース写真と、2013年以降の公式記録が確認できる。

レース種目は、2013年から16年までは9K,17Kの二種目であったが、本年より26Kレースが新たに加わり、3種目となった。レース規模に関しては、トレイルレースということもあり、500人前後の大会であり、台北市内で開催されるロードレースに比べるとこじんまりとしたレースである。台湾のロードレース参加者の傾向として、応募者数はフル<ハーフ<10K以下となるのが定石であるが、本レースに関しては距離の長い17K>9Kの傾向が継続している。作者は四年連続で17Kレースにエントリーしたが、今年は、26K組が新設され、種目変更も可能の通知をもらったが、4時間以上も蒸し暑い山中を彷徨うだけの自信が持てなかったことから、当初の17Kでの参加となった。

ここ数年の参加人数の動向を表1に記したが、例年通り、17Kが最人気で26Kが最少エントリーであった。

表1 指南宮トレイル・レース参加者の推移

	総計	9K 参加者	17K 参加者	26K 参加者
2013 年	542 人	139 人	403 人	—
2014 年	589 人	193 人	396 人	—
2015 年	397 人	123 人	274 人	—
2016 年	378 人	110 人	268 人	—
2017 年	436 人	129 人	194 人	113 人

参加費用は海外レースでは偶に見られるが台湾ではまだ珍しい、早い段階での申し込みがお得な「早割制」となっている。コストパフォーマンスにシビアな台湾人にとって、「参加商品」がランニングシャツと完走メダル、軽食（今年は焼き飯

か焼きビーフンの弁当と缶ビールかスポーツドリンクの二者選択）で900元（9K）。この価格帯は台湾人が重視するCP値は高いとは言えず、本当にトレイルレースが好きな人しかエントリーをしないレースなのかもしれない。

表2 2017年レースの参加者、費用概要

距離	参加費用	応募数	出走数	完走数	制限時間
26K	1200-1500 元	113 人	105 人	75 人	7 時間
17K	950-1450 元	194 人	160 人	145 人	5 時間
9K	900-1300 元	129 人	115 人	113 人	5 時間

3. 試走会

本レースでは、昨年引き続きトレイルレース初心者を対象にレース本番の3週間前に9Kコースで試走会が行われた。作者自身の参加の目的は、今夏に新調したトレイルシューズの慣らし履きであった。

当日は小雨だったので参加を躊躇したが、「悪条件での練習も必要！」と言いかせ、8時前に指定場所の指南宮駅に到着した。参加者は主催者側数名も含めて約30名（女子3名）ほど。参加者のいでたちや体型から判断するところ、ロードレース初心者は、ほぼ皆無で、実力派揃いの感じであった。現場では、スポンサーの一つである欧州のシューズメーカーがブースを出し、トレイル用のシューズを無料で試し履きのための貸し出し

サービスをしており、賑わいを見せていた。作者も他の参加者から「無料だよ！自分の靴を履いて走ったらドロドロになってしまう」、「それだけでも、履かなきゃ損だ」的なことを言われたが、「少し違うかなと思いつつ」、今回の練習参加の目的が自身の靴の「慣らし」だったことを思いだし、丁重にお断りした。推定10名が試履に挑んでいた。

準備体操、記念撮影をして8時20分にスタート。雨はかなり小止みになっており、さほど障害にはならなさそうである。先頭集団についていくも、かなりゆっくりしたペースで進み、心拍も平均して140は超えない。舗装路、登山道と半々くらいだが、下りは特に転ばぬように慎重に進む。道中は冠水した場所や完全なぬかるみ地などの悪路もあったが、疲労もなく完走。霧雨で涼しかったこ

ともあり、水もあまり飲まずに済んだ。しかし、好邪魔多し。試し履きのはずであった新調の靴だが、5キロくらいから踵に違和感を感じていたが、完走後に確認すると踵にかなりの大きさの水膨れができていた。試合本番では、テーピングが必需品であることを確認できたのが試走における最大の収穫であった。

4. 当日のレース

台湾のレースでは珍しく、8時という遅めのスタートなので台北市内の在住者はMRT等公共交通機関を利用して移動することが可能で有り難い。作者は士林区からほぼ始発の6時10分に最寄りの芝山駅で乗車し、7時前には動物園駅到着。駅を出ると、指南宮行きのシャトルバスが待機しており、すぐに乗り込み約15分で到着、10分ほど参道を歩いていくと、先着していた台北日本人学校の先生方とも合流し、眼下に101ビルを含む台北市の町並みをしばし満喫し、スタート地点に移動した。

コースは推定標高220Mの大雄寶殿を出発し、5キロ地点までは登山道を駆け上がり一気に高度を稼ぎ、このコースの最高標高地点の669Mまで登った後はアップダウンを繰り返しながら、スタート地点まで下るコースであり、ウェブサイトには累積標高は1089Mと紹介してある。

当日のスタート時の気温は28度。10時には31度を記録したが。それでも標高のせいか下界よりは2-3度は低く感じる。



スタート地点の様子

主催者の簡潔な説明やスタート前のカウントダウンもないまま、定刻通り8時に号砲。

今回は、軽さを重視してハイドレーション付きザックを背負わず、ウエストポーチに600CCのペットボトルだけ所持して挑む。スタート直後の急坂を300メートルほどのぼると先日の試走時の集合場所の指南宮駅をかすめる。9K参加者の中には、すでに歩き出す者！も散見された。すぐに、9K組と17K,26K組のコースに分かれる。1Kくらいまでは上り坂の舗装路を走った後、ウォーミングアップのように舗装路と並行した登山道が出現し、オフロードを1キロほど走り、再び舗装路に出る。この辺りまで来るとスタート時の混雑は緩和され、自分のペースで走れるようになる。しかし、山道に入ると渋滞が起きるので、なるべく前半3キロは飛ばして先頭集団に近い所で走るように心がける。

3キロ地点を過ぎる頃には舗装路は終わり、未舗装の登山道に入る。かなり勾配のある急登となり、標高を一気に稼いでいく。



急登は走らず歩きます

週末のため、年配のハイカーグループも多いが、こちらから「借過一下(ちょっと失礼します)」と声をかけると、彼らもすぐに「レースの選手が来たぞ、脇に寄れ」みたいな声掛けをしてくれるおかげで道がスッと空く。本来なら、「歩きたい」と思っていた急登も、ハイカーに路を綺麗に譲られると無理してでも走らざるを得なくなる。こうして想定外?のオーバーペースになりつつも、今コース最高峰の669Mまであがりきる。ここで自分のペースを確認すると、キロペースで14分以上を要していた。最高標高地点を越えてからは、標高460Mくらいまで下るが、滑りやすい岩場と階段が多くペースは上がらない。案の定、二回ほどつまずくも軽症で済んだのは不幸中の幸いか。

そうこうして、今年のレースでの異常な発汗量に気が付くことになる。山中なので強烈な日差しを受けることは無いが、かなり蒸し暑く、ハイドレーションザックを背負わなかったのを少々後悔したが後の祭り。7K手前の登山道と舗装路が合流したところで、1度目のエイドステーション。自身手持ちの携帯コップ(エコレースのため、コップは持参奨励)にスポーツドリンク2杯、水3杯、自身の携帯ジェル、ふくらはぎ攣り防止のアミノバイタル顆粒などを補給。2分の休憩後に気を取り直して走り出す。この後は、下りの登山道を駆け抜けていくが、湿った石や階段に気を遣い恐々と走っていると、広東語訛りの中国語を操る香港人女性が「脚が攣っているから、登りは駄目だが下りはOK」などと言い残して、あっという間に下って行った。11K過ぎには、久々の舗装路の下り坂になり、少しスピードアップをはかり1キロ6分台(全く速くはないが)で走り、民家の軒先や農家の庭で昼寝に興じる野良犬の傍ら、畑の畦道などを駆けていく。そろそろ、二回目のエイドステーションだろうと思っていた矢先、深い草に覆われて地面が全く見えないところで沼地に足首まで入りこみ、靴は完全に浸水してしまい、悪態

をついた直後には、13K手前の待望のステーション。ここでも、スポドリ、水にバナナ、塩も少々舐めて最後の3キロに挑む。エイドから少し進むと、昨年滑落した路を通り過ぎる。

十分に補給したはずだが、喉の渇きが早い。ラスト2キロくらいのところで、廟設置のウォータークーラーがあり、しっかり冷水を飲ませていただき、少しだけ元気になり、ゴールを目指す。ラスト1K地点で自己ワースト記録の更新を確認したが、それでも参道で2人ほど抜き去り、自己満足をして境内に駆け込むと私の名前を呼ぶ声があったので、無理矢理の笑顔とジャンプでのゴールとなった。(声援と撮影ありがとうございました!)



ゴール地点は無理してジャンプ!

- 1 昨年の滑落について・・・滑落原因は平地の登山道で倒木を飛び越えたところでバランスを崩したと記憶している。推定2メートルの滑落だったが、落ちていく不思議なスローモーション感を体験した。これまた幸いに後続ランナーの助けもあり、すぐに引き上げられ、レースに復帰することができた。

表3 記録の変遷

レース日	公式記録	総合順位	年代別順位
20140928	2時間 37分 20秒	52位 /396	12/63
20150926	2時間 39分 38秒	44位 /274	14/66
20160925	2時間 49分 51秒	48位 /268	9/60
20170924	2時間 52分 9秒	25位 /194	3/17

ゴール後は、先に9Kレースを完走していた知人らと健闘を称えあい、まだ温かった焼き飯や焼きビーフンは遠慮をして、水分だけ大量補給し会場を去った。同行した日本人学校の先生方は、初トレイルで疲弊しているかと思いきや、「ものすごくきつかったですが、凄く楽しかったです。また出てみたいです」とのことでした。作者より年齢が二回りくらい若い彼女らは、回復力も早いようでした・・・



2014年のレース

5. 後日談：年代別「3位入賞」

翌日、知人から「年代別入賞おめでとうございます！」の連絡があり、何のことかわからず、レースのサイトを確認すると年代別3位入賞が判明・・・一応、各年代の3位以上には、表彰式があり、記録証とメダルが授与されたはずであったが、自分でもまさか自己ワースト記録で入賞とは思ってもよらなかったため確認をせず、撤収してしまったので仕方がないです。これも50代のカテゴリーのせいであるという自己説明に納得する。大会関係者にメダルの件で一応連絡すると、「もう香港に持ち帰った。11月のレースでは台北市内で参加者の荷物の受渡しをするので、申し訳ないが、その場にいればメダルを渡すことはできる」という、回答を素直に受け入れ、メダルに会えることを楽しみにしたいと思う。

思うように走れたことのない、このコースだが、台北市内でジャングルのような雰囲気のある山を走るのは、貴重であり、恐らく来年も参加したくなる不思議な魅力のあるレースである。



2016年のレース

日本台湾交流協会事業月間報告

主な日本台湾交流協会事業（10月実施分）

10月	場所	内容	主な出席者（日）	主な出席者（台）
4日	東京	日台産業協力架け橋プロジェクト（日台商談会セミナー）	植垣祥司・ASE ジャパンシニアディレクター、角田識之・日台経営コンサルタント会社代表取締役、重光悦枝・重光産業代表取締役副社長	
5日	東京	駐日台北経済文化代表事務所主催「双十節」レセプション（於：帝国ホテル）	大橋会長、谷崎理事長、舟町専務理事（本部） 他	謝長廷・駐日代表 他
6日	台北市	日本近代洋画大展開幕式（後援事業）	長谷川智恵子・日本洋画商組合理事長、薩摩雅登・東京芸術大学教授、沼田代表、塩澤主任（台北） 他	邱義仁・台湾日本関係協会会長、楊子葆・文化部政務次長、林曼麗国立台北教育大学教授 他
7日	東京	一般財団法人台湾協会主催「台湾関係邦人物故者追悼法要」（於：築地本願寺）	柿澤総務部長（本部）	
7-8日	台北市	博多伝統工芸 in 台北（主催事業）（於：台北事務所文化ホール）	木村誠・博多伝統工芸館館長、西野主任（台北） 他	
9日	苗栗県	第八回台湾全国青少年太鼓大会（後援事業）（於：苗栗芸文中心）	塩見和子・日本太鼓財団理事長、塩澤主任（台北） 他	王妙涓・台湾太鼓協会理事長 他
13日	台北市	沖縄ナイトイン台湾	翁長・沖縄県知事、沼田代表、横田副代表、中杉主任、水ノ江主任、松田主任（台北）	蔡明耀・外交部主任秘書
13-14日	台南市	台南市政府文化局主催「和風文化祭」前夜祭・開幕式	福島功太・和歌山市産業まちづくり局観光国際部国際交流課主事、中郡所長（高雄） 他	李孟諺・台南市長代理、張政源・台南市副市長、郭貞慧・台南市台日友好交流協会理事長 他
14日	台北市	アジア太平洋シンクタンクサミット	野上義二・日本国際問題研究所所長、沼田代表、塩澤主任、佐倉主任（台北） 他	蔡英文総統、李大維・外交部長、田弘茂・海峡交流基金会董事長 他
14日	台北市	全国高校生スピーチコンテスト（後援事業）	塩澤主任、矢崎専門家（台北）	蘇克保・東呉大学日文学系主任 他
15-21日	東京、萩市、山口市、下関市、福岡市	許立明・高雄市副市長招聘	愛知和男・日本介護事業連合会会長、武藤真祐・医療法人社団鉄祐会理事長、藤道健二・萩市長、広中勝久・山口県副知事、前田晋太郎・下関市長、谷崎理事長、柿澤総務部長、古跡副長（東京） 他	
17日	東京	JNTO 主催ビジット・ジャパン台湾訪日教育旅行促進事業「日台教育旅行交流会」	日本政府観光局・小堀守理事、文部科学省国際教育課・西隆平専門官、柿澤総務部長、松田副長（本部）	台湾教育部国民及學前教育署・王鳳鶯簡任秘書、台湾国際教育旅行聯盟總會・薛光豊総会長、台湾観光協会東京事務所・鄭憶萍所長 他
17日	台北市	牛肉輸入解禁記者発表	南波・日本畜産物輸出促進協議会理事長、相馬主任、馬場主任（台北） 他	邱創進・財団法人中央畜産会執行長 他
18日	台中市	領事出張サービス	谷川主任（台北）	
19日	台北市	台北日本人学校夏祭り反省会出席	谷川主任（台北）	
19日	台南市	領事出張サービス（於：内政部移民署台南市第一服務站）	鈴木主任他1名（高雄）	
19-20日	台北市	2017 幸梅「吟秋」池坊研究会生け花展（於：台北事務所文化ホール）		
20日	東京	玉山銀行東京支店オープニングレセプション	舟町専務理事（本部）	
21日	台中市	台中日本人学校秋祭り出席	谷川主任（台北）	
21日	台北市	台北日本人学校スポーツフェスティバル出席	西海副代表、谷川主任（台北）	
23日	台北市	2017 年台日雙邊畜禽防疫政策交流検討会	熊谷・農水省消費・安全局動物衛生課長、馬場主任（台北） 他	黄金城・行政院農業委員会副主任委員、邱創進・財団法人中央畜産会執行長 他

23日-26日	台北市	手漉き和紙写真展「Impressionisti」 花の様な女性×手漉き和紙（後援事業） （於：台北事務所文化ホール）		
25日	東京	第14回日台産業協力架け橋プロジェクト 交流会議	江藤貿易経済部長、石田貿易経済 部次長（本部） 他	周立・駐日台北経済文化代表事務 所経済組長 他
25日	京都市	日台産業協力架け橋プロジェクト （セミナー）	角田副長（本部）	徐竹先・TXA 創業者私人董事会 総経理、巫震華・Free Bionics CEO、中山宗彦・GUC ジャパン代 表取締役
26日	高雄市	2017年高雄国際食品展開幕式出席	中郡所長（高雄）	陳菊高雄市長 他
27日	台北市	おしゃべりコンサート（後援事業） （於：台北事務所文化ホール）	塩澤主任（台北）	
27-30日	台北市	ITF（台北国際旅行博）	中杉主任、水ノ江主任、松田主任（台 北）	陳建仁・副総統、張景森政務委員、 范植谷・交通部次長兼、菊蘭・台 湾觀光協会会長 他
28日	台中市	台中日本人学校学習発表会出席	谷川主任（台北）	
28日	高雄市	高雄日本人学校運動会出席	万年博之・高雄日本人会会長、高 橋友幸・同日本人学校校長、中郡 所長（高雄） 他	呉軒銘・高雄市苓雅区中正国民小学 校長、蔡智文・高雄市鹽埕国民中学 校長、鄭淑清・玉成幼稚園長 他
30日	高雄市	高雄市・長野県茅野市間中学校交 流における交流会出席	山田利幸・長野県茅野市教育長、 安藤主任（高雄） 他	范翼縁高雄市教育局長他、高雄 市の中学校関係者
31日	台北市	日台教育会議	西海副代表、塩澤主任（台北） 他	黄冠超・国際司副参事 他

交流 2017年11月 vol.920

平成29年11月24日 発行

編集・発行人 舟町仁志

発行所 郵便番号 106-0032

東京都港区六本木3丁目16番33号

青葉六本木ビル7階

公益財団法人 日本台湾交流協会 総務部

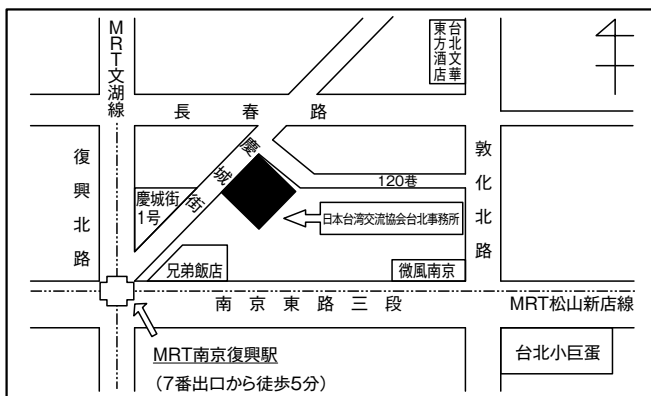
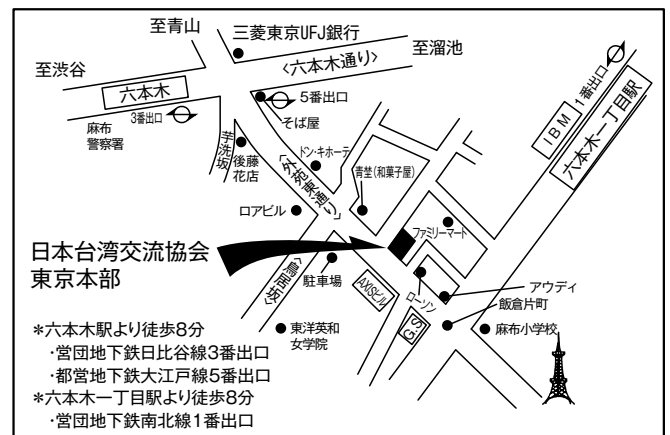
電話 (03) 5573-2600

FAX (03) 5573-2601

URL <http://www.koryu.or.jp>

表紙デザイン：株式会社 丸井工文社

印刷所：株式会社 白樺写真工芸



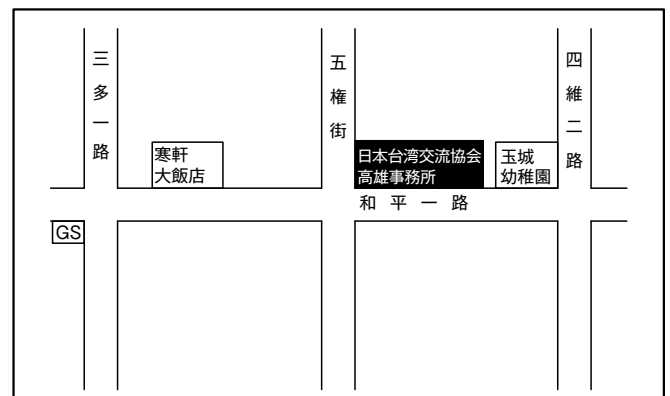
台北事務所 台北市慶城街28號 通泰大樓

Tong Tai Plaza, 28 Ching Cheng st., Taipei

電話 (886) 2-2713-8000

FAX (886) 2-2713-8787

URL http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top



高雄事務所 高雄市苓雅区和平一路87号

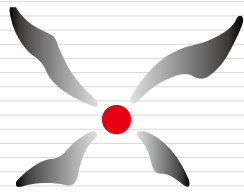
南和和平大樓9F

9F, 87 Hopping 1st Rd., Lingya Qu, kaohsiung Taiwan

電話 (886) 7-771-4008 (代)

FAX (886) 2-771-2734

URL http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3_contents.nsf/Top



公益財団法人

日本台湾交流協会

Japan-Taiwan Exchange Association

